昭和55年11月15日発行（毎月1回15日発行 通巻133号） 昭和55年10月9日第三種郵便物認可

バドミントン 11

The Badminton World No.133 1980





carlton

That's the name of the game

ニュー・フェザー・シャトルコック

carlton SUPER

衝撃のシャトル! 今,カールトンから。

常に世界のバドミントンをリードする英国カールトン社が,またもや画期的な発明をやり遂げました。ナイロン・シャトルコック一筋に半世紀,世界のナイロン・シャトル市場で90%以上のシェアを持つカールトンならではの新製品です。研究・開発に5年以上の歳月を費やし,数億円にのぼる開発費を投入して完成されたこの新製品は,従来の水鳥球とほぼ同じ型体と性能を有し,しかも耐久性は3倍～5倍という画期的な製品です。世界的に水鳥球の供給が,問題とされている今日,私達はこの新製品に絶大なる自信を持ち,〝ナイロン・シャトルコック〟と言わずあえて〝ニュー・フェザー・シャトルコック〟と呼びたいと思います。カールトンは常に一歩先を見つめ明日のバドミントンを考えます。ご期待ください。

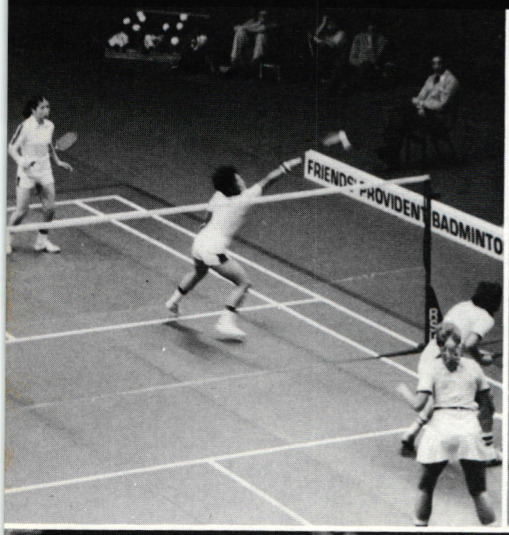


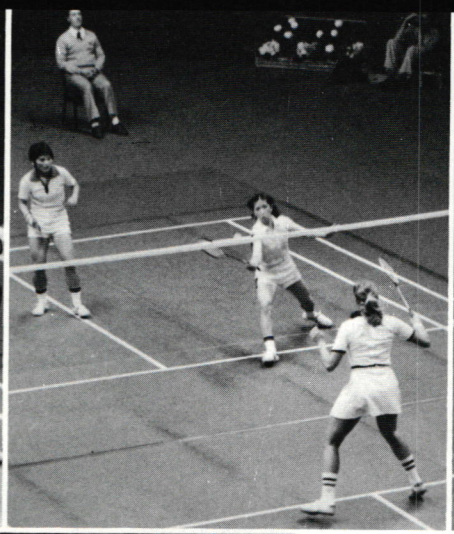
1ダース¥6,000(1個¥500)

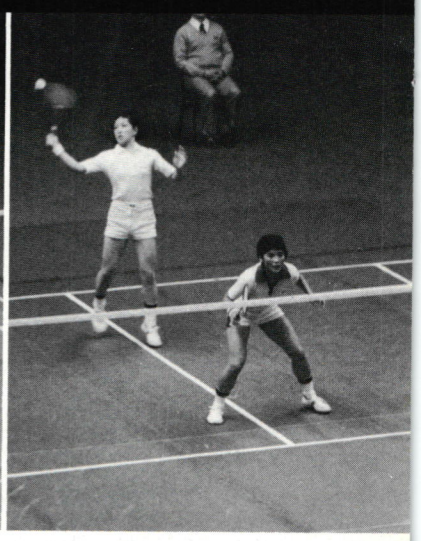
10月下旬発売

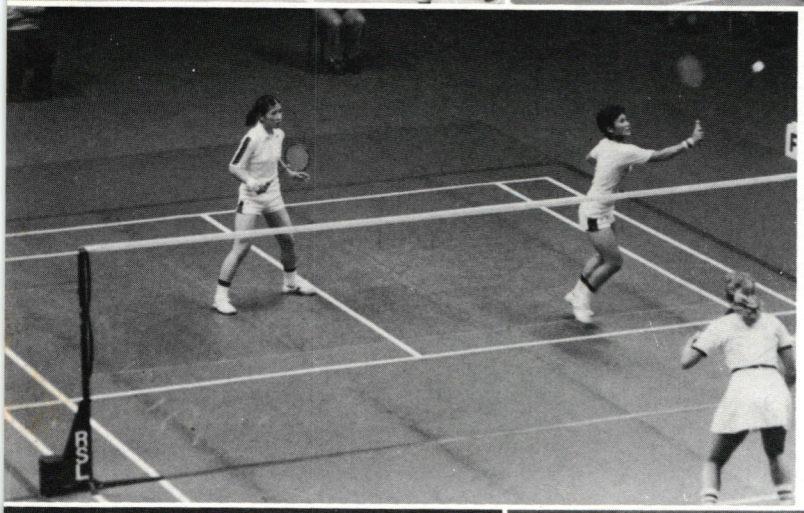
METRO 総輸入元 メトロレジャー株式会社 〒101 東京都千代田区外神田5-6-4 TEL.(03)833－3661(代)

第2回マスターズ・トーナメントから

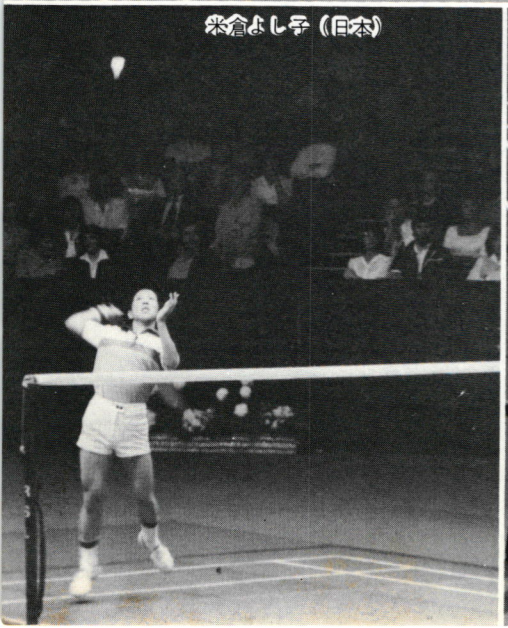




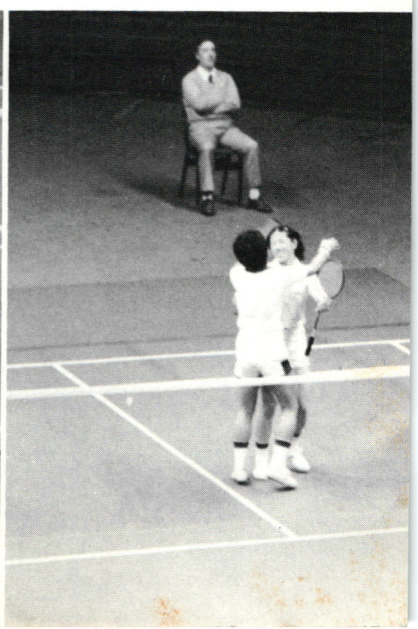




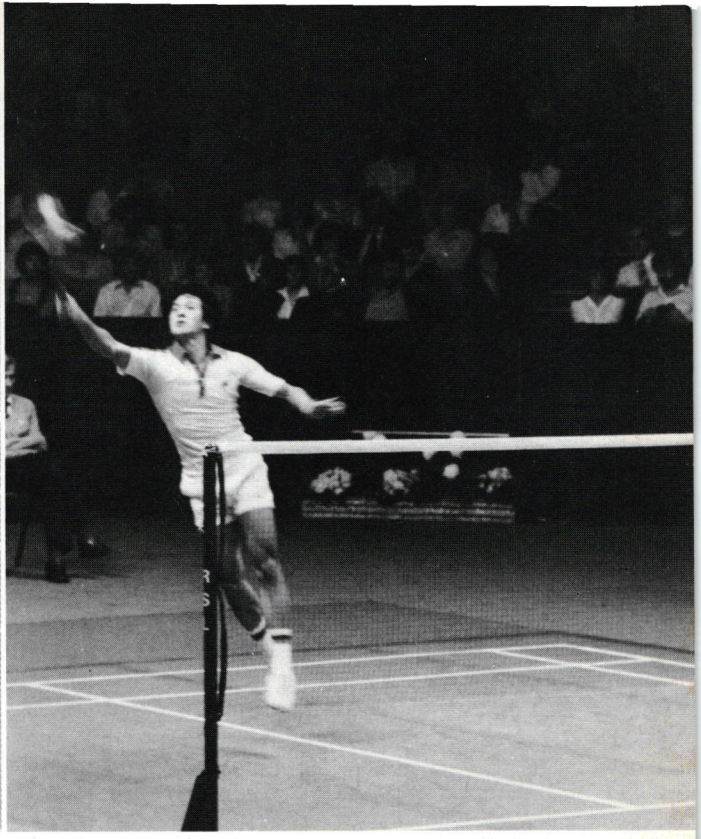
米倉よし子、徳田敦子（日本）







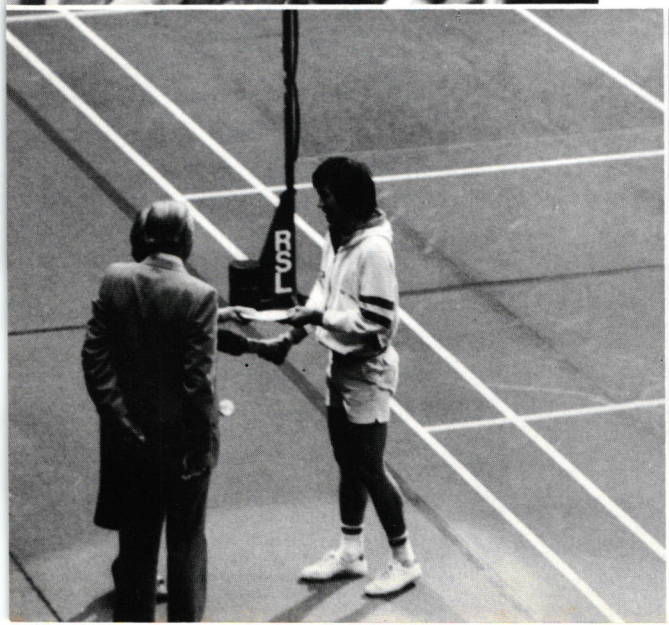




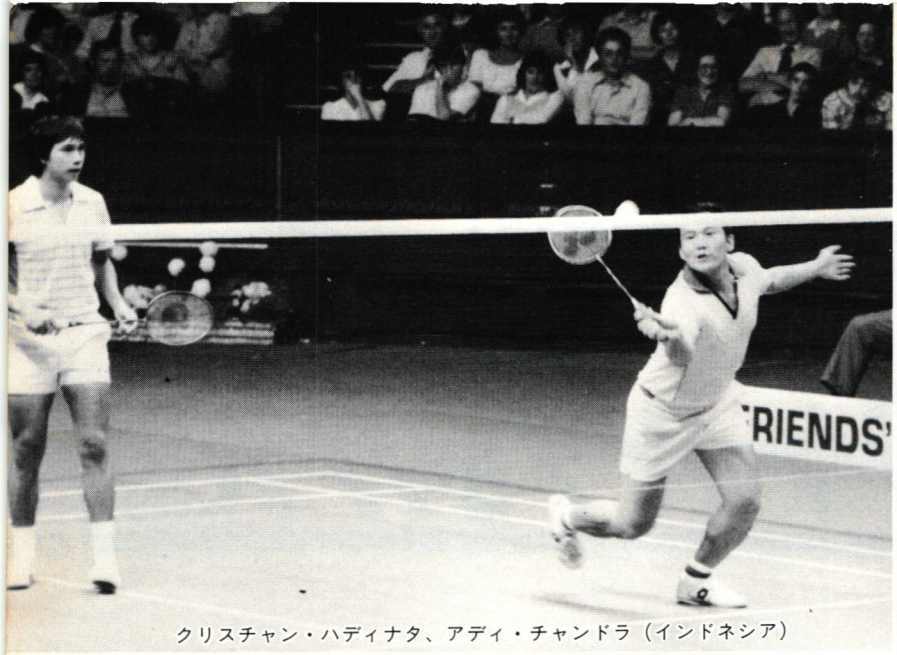
リム・スイ・キン（インドネシア）



ルディ・ハルトノ（インドネシア）



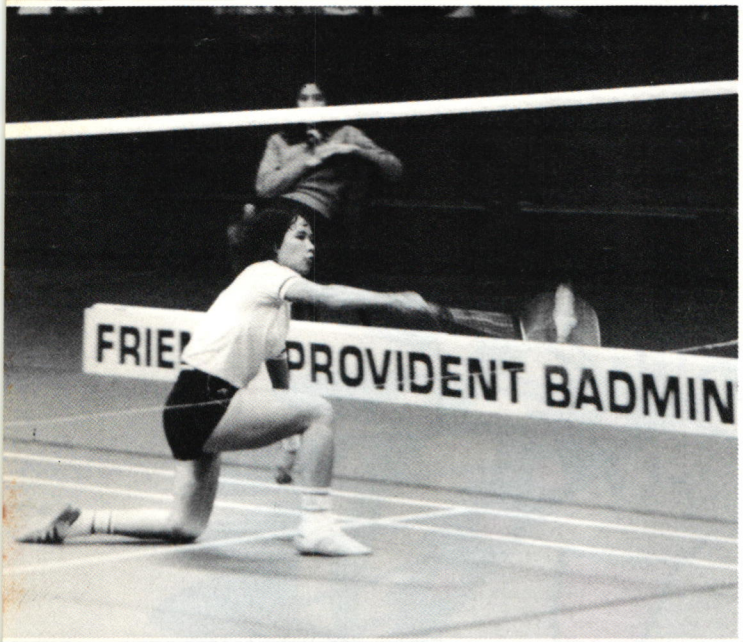




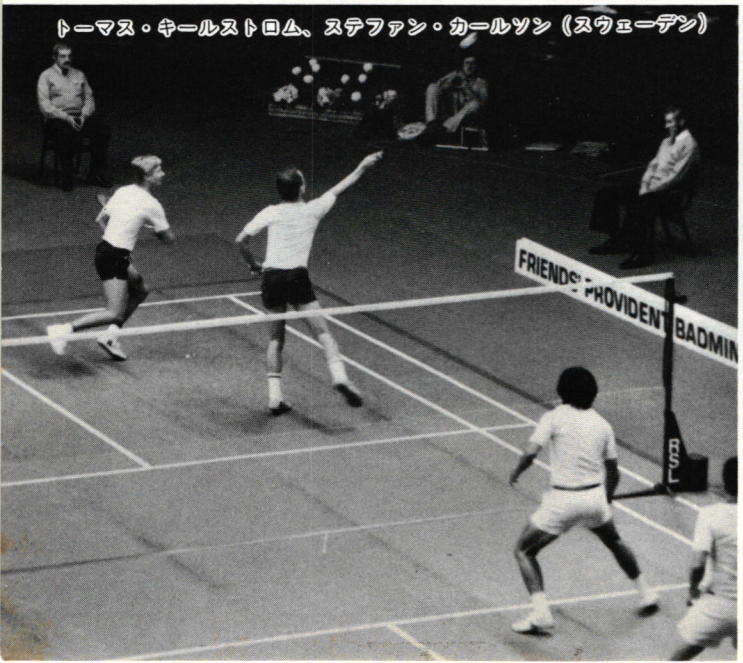
クリスチャン・ハディナタ、アディ・チャンドラ（インドネシア）



リーン・コーペン（デンマーク）



イバナ・リー・イン・ホー（インドネシア）



トーマス・キールストロム、ステファン・カールソン（スウェーデン）



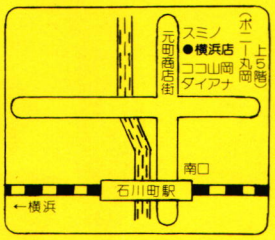
モルテン・フロスト・ハンセン

いま、鮮烈のプロショップ

ラケットショップ元町®



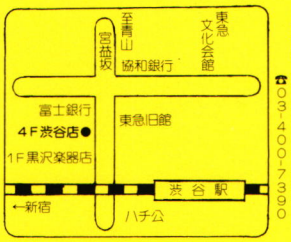
●横浜店
☎045-662-7133
4F バドミントン・プロショップ
☎045-662-9852
5F テニス・プロショップ
☎045-651-2020



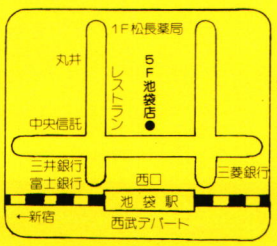
●藤沢店
☎0466-26-2552
テニス・バドミントン



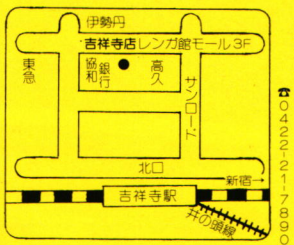
●渋谷店
☎03-3400-7390
バドミントン・プロショップ



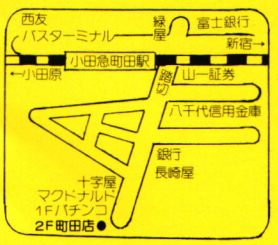
●池袋店
☎03-3988-0215
バドミントン・プロショップ



●吉祥寺店
☎0422-21-7890
バドミントン・プロショップ



●町田店
☎0427-28-6050
バドミントン・プロショップ



バドミントン 11

❶ グラフ 第２回マスターズ・トーナメントから	㉜ 三つどもえの女子複 ハルトノ逆転勝ち
❻ 第35回国民体育大会 成年男子ほか	㉝ 混合複に新星 米倉決勝へ進む
❽ 近づく第２回日本リーグ その展望（男子の部）	㉟ コーペン冷や汗 〝神様〟敗る
⓯ 小島一平のガッツ・オピニオン 栃の葉国体に参加して	㊱ 百戦練磨の勝利 米倉組みごとに優勝
⓲ 28回を迎えた早慶戦 強烈なライバル意識と深い友情の両校	㊳ マレーシアの光と翳り その栄光と落日……そしていま
㉖ 関東大学秋季リーグ戦 ガッツ&フェアープレー賞受賞者の声	㊵ コプスのコーチを受けた10日間 すばやいタッチと攻撃的プレーをめざせ
㉚ 第２回マスターズ・トーナメント 米倉・徳田組すばらしいゲームを展開	㊹ 81年カレンダーができました 編集室から
㉛ 湯木突然の発熱 リム・スイ・キンは安泰	

◇表紙デザイン・構成，本文カット＝野間デザイン室

◇今月の表紙＝第23回社会人選手権で久しぶりにオシドリコンビを見せた梅野尾夫妻　　撮影＝赤星三樹

第35回国民体育大会〝栃の葉国体〟

のびる力　むすぶ心　ひらくあした

――速報――

第35回国民体育大会秋季大会は〝栃の葉国体〟のテーマで、〝のびる力　むすぶ心　ひらくあした〟をスローガンに、栃木県下で開かれた。

バドミントン競技は、10月13日から16日まで、真岡市総合体育館で成年男女、少年男女の4種目に熱戦がくり広げられた。

成年男子に優勝した富山は、成年女子、少年女子にも好成績をあげ、総合優勝をとげた。

全県出場の成年女子は東京、少年男子は滋賀、少年女子は熊本がそれぞれ優勝した。

成年男子

成年男子は今大回から教員を1名メンバーに入れることになったため、戦力アップのチームが多かった反面、オーダーに四苦八苦というところも見受けられた。

ベスト8、千葉・愛知・栃木・石川・北海道・富山・大阪・神奈川のなかから、愛知・石川・富山・神奈川がベスト4に進出した。

愛知は山本秀樹、坂本宏志の二人が大車輪の活躍。石川は長谷川進、舛田吉光の教員コンビを軸に、スタミナ男の堂谷内均。富山は今泉勉のベテランが、進境著しい米正隆と組んでの登場。神奈川は最年長小島一平、社会人ベスト4の管敏明に、レシーブ力抜群の池田隆治の布陣だったが、池田が負傷のため出場できず苦しい闘い。

こういったチーム力を背景に、決勝は富山×石川の北陸勢同士となった。

石川は長谷川がダブルスとシングルスに連続出場し、必勝体勢。一方の富山も米が連続。このオーダーからダブルスがカギとみられたが、それにふさわしい内容となり、ファイナルゲーム、セッティングで、ともにマッチポイントを握るという白熱ぶりだった。

このダブルスをもぎ取った富山は勢いに乗り、米はシングルスでも長谷川を一方的に倒して一気に優勝を決めた。

バドミントン競技が国体にとり入れられてから、じつに31年目の快挙だった。

また3位には、小島一平が意地をみせてダブルスをファイナルゲームの末取り、第1シングルスの管が坂本に敗れると、第2シングルスでまたもやファイナルゲームを闘い、神奈川を3位に導いた。第1、第3ゲームセッティングという大激戦で、オールジャパンV8がだてではないことを、みごとに実証した。

◆成年男子決勝

富山	2	D 1—0				
		S 1—0	0	石川		
今泉						
米	2	15 15 10—15				
		17—16 5—15	1	舛田		
米	2	15 15—4				
		15—9	0	長谷川		

◆3位決定戦

神奈川	2	D 1—0				
		S 1—1	1	愛知		
小島						
管	2	15 15 10—15				
		15—9 13—15	1	山本		
管	0	9—15				
		7—15	2	坂本		
小島	2	18 15 17—18				
		13—21	1	山本		

成年女子

成年女子は全県出場の年にあたっているため、47都道府県が覇を競った。レベルの格差は仕方のないところだったが、その中でかつての名プレーヤーが、ママさん、主婦となった現在、ふたたびラケットを握ってシャトルを追う姿が見られた。

富山の牧野（塩崎）睦子さん、今泉（田所）静子さん、奈良の浅利（柴山）きよ子さんたちである。

ベスト8は、栃木・滋賀・千葉・富山・埼玉・愛知・東京・大阪であり、この中から滋賀・千葉・愛知・東京が準決勝へと駒をすすめた。

準決勝は、滋賀が千葉を降したが、これは谷美津代の大活躍によるもので、ダブルスではマッチポイントを握ったあとパートナーが足を負傷し、ほとんど立っていられないような状態となった。それを抱きかかえるようにしてコートに立たせ、一人でシャトルを追い、ついに勝ったものである。

決勝は東京との対決となったが、すでに前日の大激戦ですべてを使い果たしたかのような滋賀は、東京の前に完敗。

3位決定戦は愛知が貴重なダブルスをファイナルゲームでものにし、つづくシングルスでも渡辺喜美が千葉の本吉登美栄をストレートで降した。

東京の優勝は、4年ぶり6度

目である。

◆成年女子決勝

東京 2 (D 1—0, S 1—0) 0 滋賀

端 2 (15—2, 15—6) 0 谷
高岸

渡辺 2 (11—5, 11—2) 0 谷

◆3位決定戦

愛知 2 (D 1—0, S 1—0) 0 千葉

渡辺 2 (13—15, 15—10, 15—12) 1 飯野
小松

渡辺 2 (11—4, 11—2) 0 本吉

少年男子

少年男子はインターハイで顔を合わせた選手が、再び対戦するということもあり、興味津々の種目。

まず準決勝で滋賀と熊本が対決。ダブルスをまず熊本が取ったあとの第1シングルスは、熊本・井上哲章、滋賀・山本裕幸。これはインターハイ個人戦シングルス決勝の再現。

インターハイ・チャンピオンの井上が第1ゲームを先取したあと、山本が盛り返し第2、第3ゲームを連取して、みごとに雪辱をとげた。これが勝負ポイントとなり、第2シングルスでも滋賀の松浦進二がストレート勝ち。

一方の準決勝は地元の栃木が順当に奈良に勝ち、決勝へ進出。滋賀対栃木の決勝戦。栃木はこの種目に優勝すれば総合優勝がころがりこみ、もし負ければ3位にとどまることになる。

両チーム死力を尽した闘いがダブルスで始まった。

インターハイ個人戦ダブルス決勝では、滋賀が山本裕幸・馬杉武司のペアで、大島正志・大堀円を降して優勝しているが、今回は山本のパートナーは松浦進二。ここでも滋賀ペアは快調にストレート勝ち。

そしていよいよ第1シングルス、山本と大島の一戦。

インターハイ団体戦、個人戦ともに山本が勝っているため、大島としては何とかして一矢を報いたいところ。

もう後がない地元は、大声援を送り、これに支えられるように大島はすばらしいプレーをみせ、ファイナルゲーム、セッティングで山本を降し、優勝へ望みをつないだ。

しかし、第2シングルス戸村正樹は、松浦進二に惜敗、栃木の大望は消えた。会場いっぱいに落胆のざわめきが一瞬広がったが、それもたちまち両チームへの称賛の大拍手に取って代わられた。

3位は、熊本が奈良をストレートで降した。

◆少年男子決勝

滋賀 2 (D 1—0, S 1—1) 1 栃木

山本 1 (15—4, 15—10, 13—18) 2 大島
松浦 2 (15—10, 15—11) 0 大堀

◆3位決定戦

松浦 2 (15—8, 18—16) 0 戸村

山本 2 (15—10, 15—12) 0 古賀
伊東

熊本 2 (D 1—0, S 1—0) 0 奈良

井上 2 (15—4, 15—6) 0 中村
伊東

少年女子

インターハイで旋風を巻き起こした熊本が、国体でもその力を発揮するか、あるいは新潟が巻き返すか。

少年女子ベスト4には、大阪・富山・熊本・新潟が残った。

その中でもやはり熊本の実力は圧倒的だった。高峯和子、陣内貴美子の二人は単複ともに安定しきっており、多少せることはあっても、自信あふれるプレーは、他チームを寄せつけなかった。

準決勝で、新潟の山内美子が陣内から第2ゲームを奪い、ファイナルゲームにもち込む気迫を見せたが、ポイントをあげるには至らなかった。

決勝でも大阪の尾崎升美、松田全代のペアが、高峯・陣内に対し第1ゲームでセッティングとなったが後続なく、結局ストレートで敗れ去った。

3位は富山をふり切った新潟が入賞した。

熊本の強さが強く印象づけられた少年女子だった。

◆少年女子決勝

熊本 2 (D 1—0, S 1—0) 0 大阪

高峯 2 (17—14, 15—11) 0 尾崎
陣内 松田

高峯 2 (12—11, 11—2) 0 尾崎

◆3位決定戦

新潟 2 (D 1—0, S 1—0) 0 富山

野上 2 (15—9, 15—11) 0 今川
山内 田向

山内 2 (3—11, 11—3, 11—2) 1 今川

◆バドミントン競技男女総合成績（天皇杯得点）

①富山（14・5）②滋賀（10・5）③栃木（10）④熊本（9・5）⑤愛知（7）⑥大阪（6）⑦神奈川（4・5）⑦新潟（4・5）

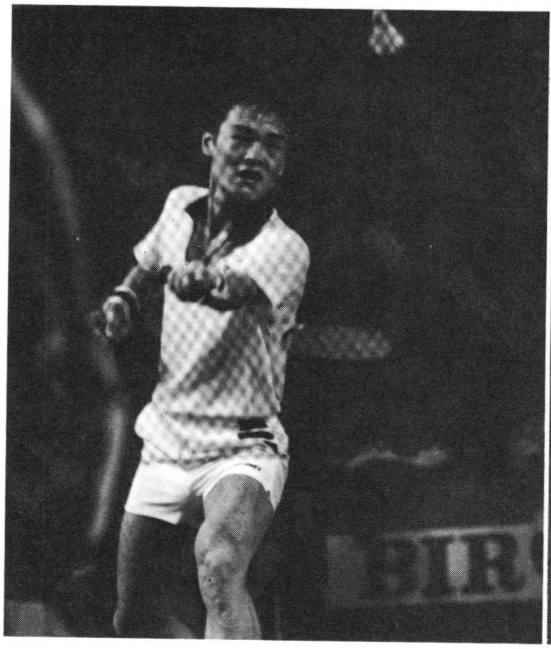
◆女子総合成績（皇后杯得点）

①大阪（13）②愛知（10）②熊本（10）②東京（10）⑤富山（7）⑥滋賀（5・5）⑥栃木（5・5）⑧新潟（4）

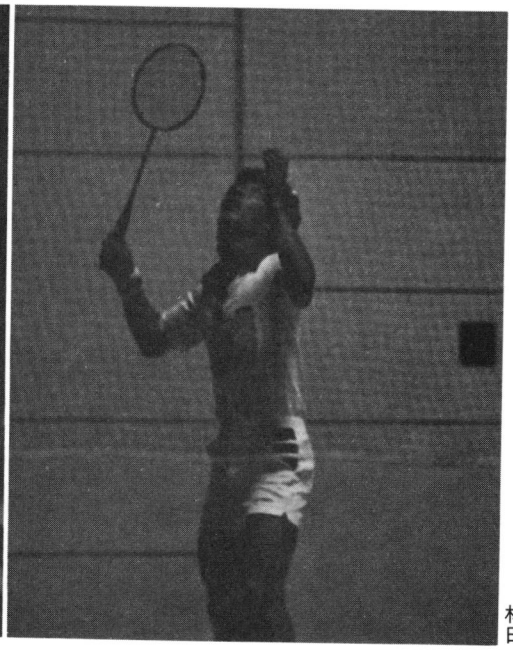
★第35回国民体育大会の詳報は次号でお届けします。

近づく第2回日本リーグ

その展望（男子の部）



土田



林田

バドミントン・日本リーグの第2回大会が近づきました。

日程は別表のとおりですが、今回は、男女とも1チームずつふえて各6チームで争われます。

試合形式は前回と同じ2複1単で行われます。参加チームは、

1 ヨネックススポーツ
2 電電東京
3 河崎ラケット
4 高岡市役所
5 全日本学生選抜

そして、新加入の電電北海道。女子が、1 サントリー
2 河崎ラケット
3 ヨネックススポーツ
4 日本電装
5 全日本学生選抜

そして、新加入の三洋電機。の各6チームです。

見どころとしては、ユーバー杯大会を来年に控えた女子は、ナショナルチーム選手と、それにつづく各選手がどのようなプレーを見せるか。

男子は世界に通じる選手となるべき若手がどのような成長ぶりを見せるか、といったところですが、開催地が前回の6カ所から13カ所と大幅にふえ、全国のファンに見てもらえるという点も、大きな進歩です。

それぞれの開催地は、いまから趣向をこらして準備を進めていますので、大いに楽しみなところです。

そして、新加入の電電北海道と三洋電機がどのような活躍をするかにも注目したいと思います。

それでは今月号では、男子各チームの紹介と、その戦力・抱負などをさぐってみましょう。

ヨネックススポーツ

部長／土田隆
監督／栂野尾昌一
選手／㊞飯野佳孝、栂野尾昌一、辻敏弘、後藤武信、長谷川博幸、林田草樹、木村雅彦、西村修、千葉智、西出龍守

▼前回優勝チーム。その中からダブルスにすぐれたプレーを見せた大場が抜けたが、昨年の学生ベスト4の林田（青学大出）がその穴を埋めようとしている。栂野尾・飯野のダブルスは断然の強さをもっており、若手がポイントを確実にあげるようになると、他チームを寄せつけないことにもなる。

しかし、辻、長谷川にややもろい面があり、とくに長谷川は最近調子を落としており、そのあたりに不安材料がある。

林田の若々しいプレーにも期


米


銭谷

待したい。

電電東京

部長／丸山芳春
監督／池田信孝
選手／㊞池田信孝、田所光男、尾崎幹雄、土田証雄、久保勇次、宮森庄吉

▼単複に安定した力をもっているのが強味。

池田・尾崎のダブルスは動かぬところから、田所・土田のダブルスを起用し、新人の宮森（法大出）をシングルスに使うか。それとも土田をシングルスにもっていくかが、オーダーのむずかしいところだろう。

ヨネックスの2連勝を阻止するには最短距離にいるだけに、そのチームワークとがんばりが楽しみである。

河崎ラケット

部長／堺栄一
監督／今井茂満
選手／㊞今井茂満、銭谷欽治、角田重夫、中井基夫、根岸淳、西川慎一、斉藤敏行

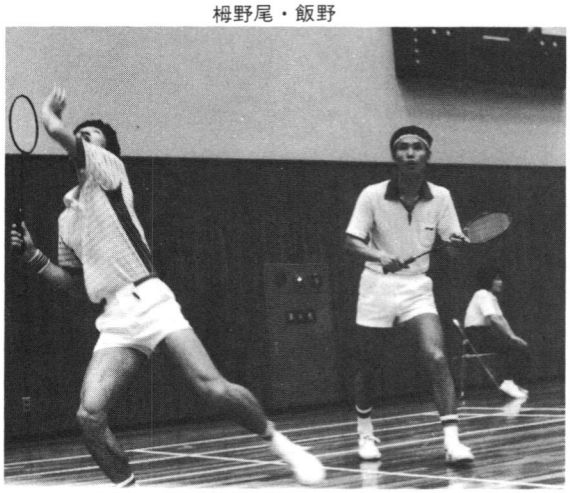
▼昨年は4位という成績に終わり、なんとか巻き返しをはかりたいところ。

しかし、銭谷のシングルスを除けば、これといったポイントが計算できず、昨年以上に苦しい展開が予想される。

この苦境を脱するには、一にも二にも中井の奮起である。ダブルスのセンスにおいては、日本でも一、二を争うものをもっており、長身からの攻撃もかなりの破壊力を備えている。その恵まれた資質を生かしきれないのは、あくまでも本人の精神的な自覚不足であろう。

これといった補強もままならぬ今大会は、彼の気迫と、ベテラン今井・斉藤ペアのガッツがこのチームのすべてをにぎって

梅野尾・飯野



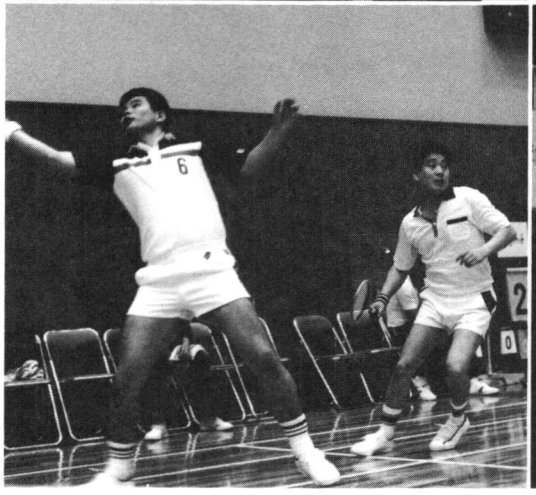


池田・尾崎



宮森


米沢


今井・斉藤


長谷川

いる。

高岡市役所

部長／森川衛
監督／中山邦夫
選手／㊟今泉勉、関村順治、牧野光男、米沢和男、宮林照男、米正隆、河村博之

▼昨年は勝率差で最下位の苦汗をなめた。

しかし、今年の高岡市役所はひと味もふた味もちがっている。全日本実業団大会では準優勝にかがやき、今泉、米を中心に国体でも優勝している。

とくに米の進境には目を見張るものがあり、シングルスプレーヤーとしてすばらしい成長をとげた。今泉も健在で、今回は台風の目となるかも知れない。

〔抱負〕

昨年にも増して市長、市職員の暖かいご理解と18万市民の期待にこたえるべく、Aクラス進出を合い言葉に練習に磨きをかけまいりました。全日本実業団大会では、わがチームの看板であるチームワークで決勝まで進出し、惜しく敗れたものの、第2回日本リーグでは第1回とひと味違う戦いでバドミントン愛好者にこたえたいと思っております。

電電北海道

部長／菅原光宏
監督／平山三城
選手／㊟遠藤好男、赤塚正三、木村敏男、高木勝弘、佐藤義孝、平沢徹、米山孝二、篠尾孝幸、高田浩二

▼10月5日京都での予選リーグで関東自工、滋賀選抜を破って日本リーグ6番目のチームとして加盟が決定した。

北海道から各地を転戦するということは、時間的にも疲労の面からもかなりのハンディとなろう。また、選手もベテランぞろいということで、チーム全体のコンディショニングが重要となってくる。

遠藤を柱に、各選手の活躍に期待したい。

全日本学生選抜

原稿段階ではメンバーが決まっていないが、西山博司、宮本幸弘（中大）、久郷俊明（法大）、坂井茂則、権藤浩二（日本大）といったメンバーが中心になると思われる。

〔次号では女子の展望を特集します〕

第2回バドミントン・日本リーグ日程表

	開催日（開始時刻）	開催地 会場	男子の部	女子の部
	11月29日(土) 16：00	東京都 ホテル グランドパレス	開会式	
1	11月30日(日) 13：00	東京都 代々木第2体育館	高岡市役所——電電東京	カワサキ———日本電装
			カワサキ———電電北海道	
		長岡市（新潟） 長岡市厚生会館	ヨネックス—全日本学生	ヨネックス——三洋電機
2	12月7日(日) 13：00	大阪市 大阪府立体育会館		日本電装——三洋電機
				ヨネックス—サントリー
		徳山市（山口） 徳山市体育館	ヨネックス——カワサキ	カワサキ—全日本学生
3	12月14日(日) 13：00	高岡市（富山） 高岡市民体育館	カワサキ—高岡市役所	ヨネックス—全日本学生
		上尾市（埼玉） 上尾市体育館	全日本学生——電電東京	カワサキ——三洋電機
4	12月21日(日) 13：00	倉敷市（岡山） 川鉄水島体育館	カワサキ——電電東京	ヨネックス——カワサキ
		京都市 京都府立体育館	ヨネックス—高岡市役所	全日本学生——三洋電機
		刈谷市（愛知） 刈谷市体育館	全日本学生———電電北海道	サントリー———日本電装
5	12月28日(日) 13：00	札幌市(北海道) 札幌中島体育センター	ヨネックス———電電北海道	サントリー—全日本学生
6	56年 1月11日(日) 13：00	大津市（滋賀） 滋賀県立体育館	カワサキ—全日本学生	サントリー———三洋電機
		高崎市（群馬） 高崎市民体育館	高岡市役所———電電北海道	全日本学生——日本電装
			ヨネックス——電電東京	
7	1月15日(祝) 13：00	東京都 代々木第2体育館	高岡市役所—全日本学生	ヨネックス——日本電装
			電電東京———電電北海道	サントリー———カワサキ
			閉会式	

TOKYO LETTER

by Miwako Wakazono & Carolyn Nakamura

In Japan, the hot summer has finally ended and the cool days of autumn are here.

The high school and junior high champions were determinde in August. The high school champions are Tetsuaki Inoue and Kazuko Takamine. Both of them are seniors and we believe they will be representing Japan on the courts in the future. Miss Takamine especially is one of the "badminton sisters". Her elder sister, a college student, and her younger sister, a high school sophomore, are both also taking an active part in badminton.

In preparation for the Uber Cup Contest which will be held in Japan next May, a women's team representing Japan made a playing tour of China.

They underwent intense training in various parts of the country for one week, beginning on October 3.

Although China is not a member of the I.B.F., the strength and ability of the Chinese men and women players are so outstanding that it was an extremely instructive tour for the Japanese women.

Furthermore, a playing tour was also made to Indonesia by thirteen selected men and women college students at the end of August. They trained with the local players, observed Rudy Hartono in training, and were able to study and learn from "the best in the world".

The training, in particular, under the guidance of the Indonesian coaches was quite different from that in Japan and the participating students said that they were eager to adopt many of these methods into their own training.

The forthcoming important tournaments in Japan are the Intercollegiate Championships, the National Athletic Meeting, and the All-Japan champiomships.

More overseas playing tours also been planned.

Needless to say, we intend to send our best players to the Canadian Championships and the Randers Championships. We'll be rooting for the Japanese players as we hope you will, too.

To the editorial staffs of England's "Badminton" and Canada's "Badminton Review" and"Ontario Badminton" - From time to time, we have been presenting in our magazine some of your articles, translated into Japanese, which we feel would be of great interest to our readers.

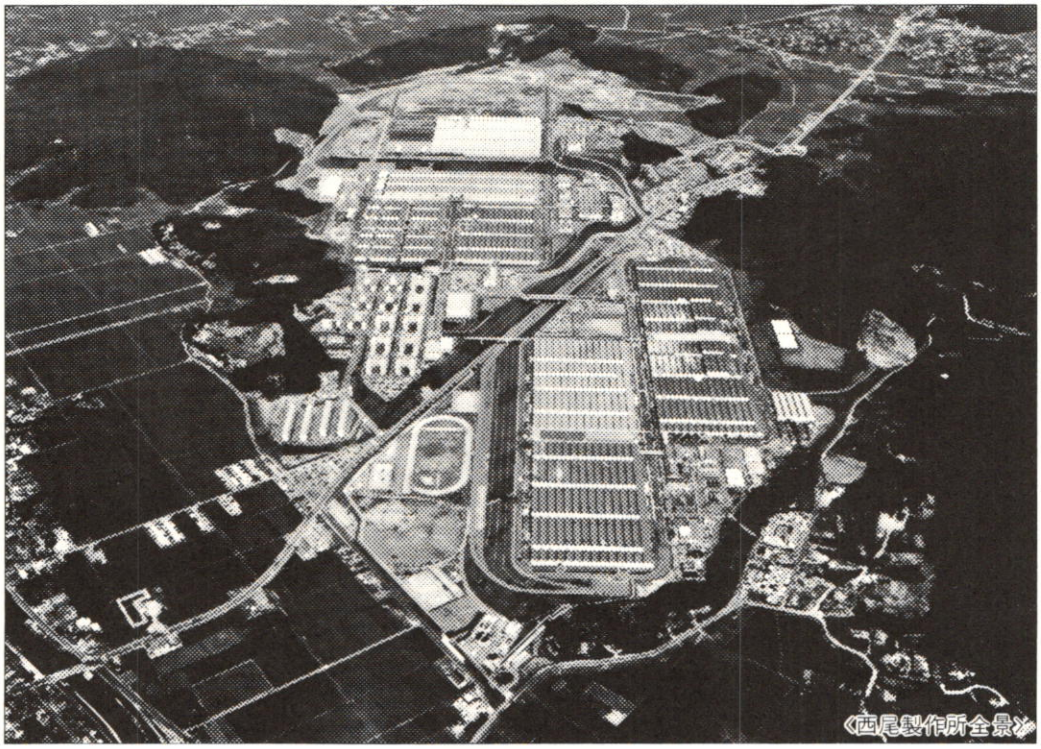
We look forward to seeing more of your enjoyable articles.

We look forward to hearing from those of you in other countries, too, so please send us your news

Well, that's all for now and until the next time...

自動車部品の総合メーカー

長年つみ重ねてきた、エレクトロニクスの技術を駆使して
自動車のエレクトロニクス化――――――
モートロニクスを進めるデンソー!!


《西尾製作所全景》

《営業品目》

●スターター	●ディストリビューター	●各種電子制御装置	●燃料噴射ポンプ
●オルタネーター	●マグネトー	●排気ガス浄化装置	●各種メーター
●ダイナモ	●ホーン	●カーエアコン	●ラジエーター
●レギュレーター	●ワイパー	●カークーラー	●スパークプラグ
●イグニッションコイル	●ウインドウォッシャー	●カーヒーター	●フィルター

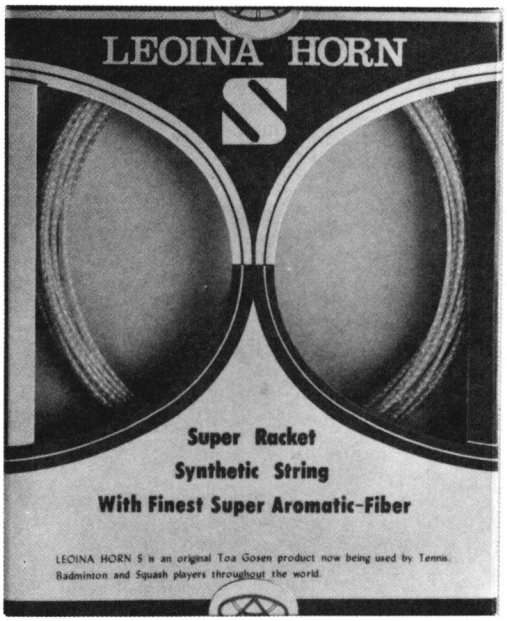
日本電装株式会社

本社／愛知県刈谷市昭和町1－1　（〒448）　TEL 刈谷(0566)22－3311

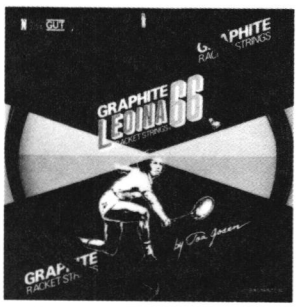


RACKET BADMINTON STRINGS

世界のトーアが贈る バドミントンガットシリーズ



レオイナ　ホーン
LEOINA HORN S



グラファイト　レオイナ
GRAPHITE LEOINA 66



レオイナ　シープ
LEOINA SHEEP 66



トーア　ストリングス
TOA-STRINGS SSW



トーア　ストリングス
TOA-STRINGS SSW

東亜合繊株式会社

〒651　神戸市葺合区八雲通３－１－25

☎078(232)1991(代)

小島一平の ガッツ・オピニオン



栃の葉国体に参加して

今回は成年女子が全県出場ということで、結婚して第一線を遠ざかっていた人々が、ママさん選手として久し振りに参加しており、なつかしいプレーが多く見られた。

また、教員男子が昨年でピリオドを打ち、今回からは成年男子の部に最低1名の教員を加えることになり、そのことによってレベルアップしたチームが目立った。少年男女は、地元の栃木が猛練習をつみ、どのような試合を展開するかが注目された。

会場のコート6面には、グリーンとブルーのマットが敷きつめられ、なんとネットの色もコートに合わせるといった非常にカラフルで華やかな雰囲気であった。さらに驚いたことには、ウォーミングアップ会場の2面のコートにもマットが敷かれていた。

いかに地元が熱を入れているかということが、このことでもよくおわかりになると思う。

国体を底辺拡大の切り札に

競技は成年女子の1回戦で幕を切って落したが、やはり全県出場ということで、実力の開きはいかんともしがたく、時折り珍プレーも出ることがあった。

すでにご存知のように、一昨年からナショナル・チーム所属の選手は国体に出場できなくなったわけであるが、私としては決定された時点から、バドミントン発展のために、このことはプラスにならないと考えている。なぜかといえば、日本はありとあらゆるスポーツが行なわれ、その中でもバドミントンは、徐々にではあるが、人口が増加している事実はあるにせよ、まだまだ一般の認識は低い。

国体というものは、今回もそうであったが、バドミントン・プレーヤーだけでなく、初めて競技を見るという人々も多数観戦に来場するのである。この事実から、日本のトッププレーヤーの素晴しいプレーを見てもらうことが、どれだけ多くのファンの開拓につながるかは、推して知るべしである。

現在の日本バドミントン協会の首脳部は、全国多数の独自に熱心な指導をつづけている人々に甘えてはいないだろうか。

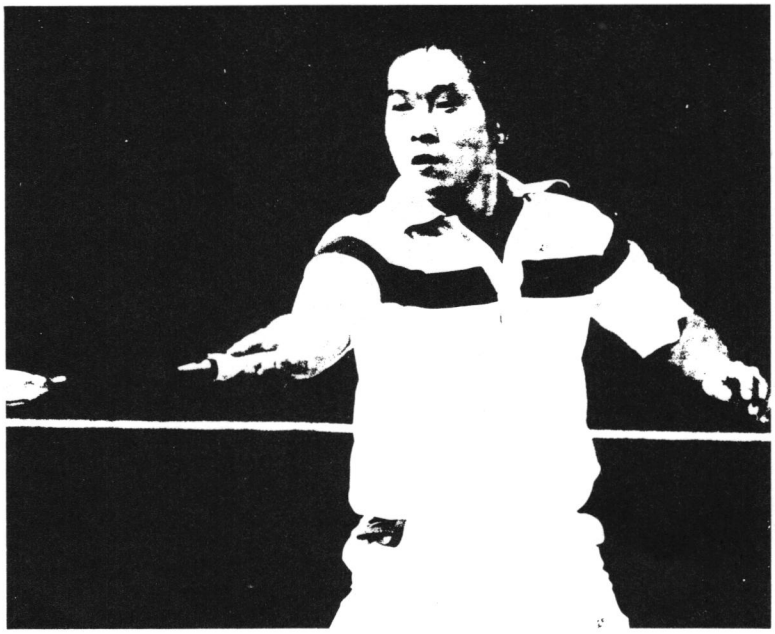
協会が先頭に立って底辺の拡大に努力しているとは、とうてい思えない。

たとえば、ナショナル・チームの合宿などは、地方協会とタイアップし、巡回しながら、お互いにプラスとなるような企画をすべきである。

地方の高校生、中学生は、やはりトッププレーヤーを目の当たりに見ることによって、強い刺激を受けるであろうし、2～3時間でも練習の相手をするなり講習会を開くなりすれば、どれだけ感激するかはかり知れないものがあろう。

多くのバックアップを忘れてはならぬ

さて、どのスポーツでも強力なプレーヤーがいてこそ協会の力も十分発揮できるわけであるし、プレーヤーあっての協会、協会あってのプレーヤーというのも、決して間違いではないと思う。しかし、現状は、あまりにも



協会あってのプレーヤーとなってはいないだろうか。

その反面、協会だけを批判するのではなく、選手自身の責任感の欠如は、はなはだしいものがある。

海外遠征や合宿といったものは、全国のプレーヤーの登録料、各大会にお金を払って見にきてくれる人々の入場料といったものがなければ実現できないことなのだから、その点をよく考え、反省してもらいたいものである。

無用のジャンプスマッシュ多用

さて、国体に話をもどしてみると、成年女子は、東京が日本リーグのレギュラーをそろえた単独チーム（端・渡辺・高岸のカワサキトリオ）が、多少ヨタヨタしながらも見事に優勝。2位には、さすがサントリーの名ダブルスプレーヤー・谷を軸にした次回開催県の滋賀。3位には気力あふれる愛知が入賞した。

地元栃木は、期待が大きくプレッシャーがかかったのか、ベスト8止まりに終わり、総合優勝をめざす栃木にとっては大誤算となった。昨年優勝しているということもあり、監督・選手の気持ちを考えると、いたたまれない気がしてならなかった。

少年女子は予想どおり、インターハイ三冠王の高峯、陣内に加え、森山を擁した熊本が危げなく優勝。高峯、陣内はインターハイの時に比べ、体つきがガッチリしたように感じ、ひとまわり大きくなっていた。そして、その自信あふれるプレーぶりから、今後の成長が大いに期待できると確信した。

しかし、ひとつ気になる点は、垂直にジャンプするスマッシュは迫力はあるが、シングルスで多用（特に深い位置から）するのは避けたほうがよいということである。

なぜならば、ホームポジションへの戻りが必ず遅れるからであり、この傾向は多くの高校生に見られることで感心できない。シングルスは、打った後の体勢が非常に大切だということである。

2位大阪、3位新潟、4位富山も健闘したが、いまひとつアピールすべき迫力に欠け、ダブルスのコンビネーション、シングルスのねばりあるプレーが見られず、最大の課題はアンティシペイション（予見、予測）であろう。

勝負の非情まざまざ

少年男子は、優勝した滋賀の山本、2位栃木の大島、3位熊本の井上の3強のプレーは、大いに将来性有望とする声が多く、私もまた同感であった。

準決勝での山本対井上のインターハイ再現は、熱のこもった試合となり、一進一退の末、山本が雪辱、第2シングルスも滋賀が取り、決勝へと進んだ。

滋賀対栃木の決勝は、地元ただ一つの決勝進出となり、場内はバドミントンとしては珍しい高校生応援団のリーダーが登場、必死の応援。その大騒ぎのなかで、まず滋賀が先勝。

山本対大島の第1シングルスは、もう後のない大島が第2ゲームの接戦をぬけだし、15－10で取り、タイ。つづくファイナルゲームもセッティングの末取り、場内は興奮状態。

第2シングルスで決着がつくということになり、また栃木はこれに勝てば総合優勝、負ければ3位ということになる。第1ゲーム滋賀の松浦が出足よく先取し、第2ゲームは先行された栃木の戸村がよくねばって追い上げ、セッティングへともつれ込んだ。しかし、場内の割れんばかりの声援もむなしく万事休す。

選手はいうまでもなく、役員、観衆すべて落胆の色隠せず、栃木は総合優勝を逸した。地元ということで、国体に向けて連日きびし

く苦しい練習、合宿に打ち込んできた選手にとっては、勝負の世界のきびしさ、冷酷さをつくづく感じたことであろう。栃木の第2シングルス戸村が、控え室で目を真っ赤にし、涙がとめどもなく流れる様子をみて、胸が熱くなると同時に、心情的には栃木に勝たせてやりたいところだった。

高校生の場合（特に男子）において、インターハイでも感じたことであるが、1ポイント取るたびに、飛び上がって喜んだり、コート狭しと走り回ることは、まったく不必要であるから、ただちに絶対やめるべきである。指導者の方々にもぜひお願いしたい。体力の無駄な消耗となり、コンセントレーション（集中力）を散漫にさせるからである。

最高殊勲選手　米をナショナル・チームに

最後に私も最年長として出場した成年男子は、今回から前述したように教員の加入でレベルアップしたチームも多く、またブロック予選を勝ち抜いてきているだけに、今までにない好試合が続いた。

結局準決勝は、見事に第1シード千葉（前回優勝）を接戦で破った坂本・山本（トヨタ自工コンビ）の愛知と石川が対戦。対千葉戦で4時間に及ぶ激戦がこたえたのか、愛知に精彩なく石川の楽勝。

一方の準決勝は富山が予想通り進出し、私の属する神奈川と対戦した。神奈川はトップシングルスの池田が、大会前の合宿で足を痛めたため使えず、この誤算が大きく、1回戦からヨレヨレの状態。青森、大阪に食い下がられ、辛うじてのベスト4進出といったぐあいで、ストレートで完敗。つくづく私もスタミナがなくなったと思った次第である。やはり年には勝てない。

北陸ブロックの1位、2位の決勝戦。じつに見ごたえのあるダブルスを展開し、今泉・米組対長谷川・舛田組、両者1ゲームずつを取り、3ゲーム目は14オールのセッティングから2オール、石川ペアのセカンドサービスでマッチポイント。長いラリーのあと、富山ペアのショットが完全にサイドを割ったかにみえ、長谷川が〝やった〟と両手を挙げ、誰しもが石川ペアが勝ったと思った瞬間、無情にもシャトルはオンライン。一転して富山のマッチポイントとなり、1ポイントを重ねて貴重なダブルスを富山が取った。

トップシングルスはどちらも連戦で米対長谷川。長谷川のていねいにコーナーをつくプレーも、いまひとつのスピードに欠け、一方の米は持ち前のしつこいねばりに加え、鋭いスマッシュをストレート、クロスにと要所要所で決めて圧勝。富山は負け知らずの全ストレート勝ちで優勝に輝いた。

今泉は、今年で10年出場の表彰を受け、しかも10年目にして初優勝、加えて総合優勝と三重の喜びは、また格別であったにちがいない。

米は最高殊勲選手であり、4試合すべて単複連戦で全勝。昨年に比べて驚くほど成長していた。よほど真剣にバドミントンに取り組んだとみえ、11月のオールジャパン、日本リーグでの活躍が楽しみであり、ぜひとも彼をナショナル・チームの一員に加えるべきだと思わざるをえない。

不可解なシステムに疑問

最後に、会場となった真岡市民の皆さん、特に民宿でお世話してくださった方々、役員の方々の親切には頭が下がる思いであった。

また、主審、副審、線審の判定は、多少のミスはあったかも知れないが、私たちの試合においては皆無、完璧で、非常に気持良く試合できたことは最高であった。

しかし、二つ非常に残念というかくだらぬことがあったことを記しておきたい。

まず、私が準決勝でベストを着用して試合に臨もうとしたところ、脱がされたことである。ベストを着てはいけないという規約でもあるのか？「まだベストを着る季節ではないから」と、とんでもない理由をつけられたのには、驚いてあいた口がふさがらなかった。

もう一つは、シャトルを交換する場合、いちいち主審に渡し、「取りかえてよろしい」という了解を得てから交換するということである。

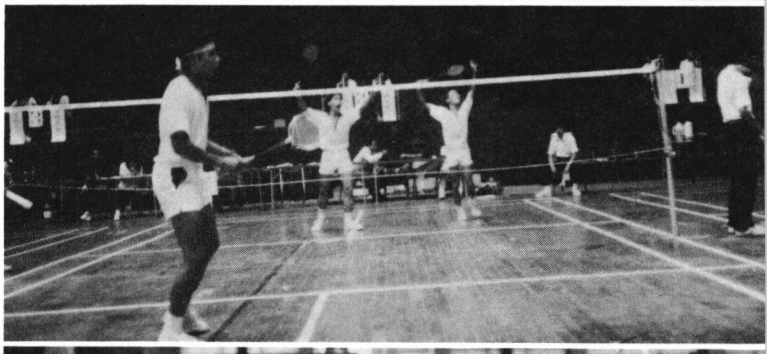
対戦中のお互いのプレーヤーがOKであれば、交換してもよいのではないだろうか。外国でこのようなシステムをとっているところは絶無。いったい誰がこのようなことを考え出したのか知らないが、即やめていただきたいものである。

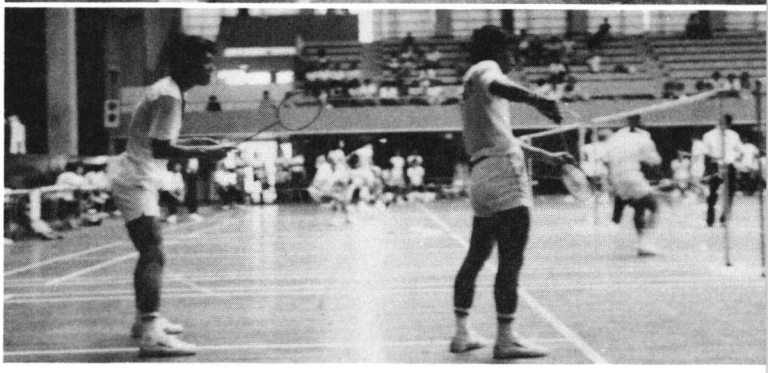
苦言を呈したことも多くあったが、これも、バドミントンのプレーヤーとして、ファンとして私の心にしまっておくことのできないことなので記した次第である。

28回を迎えた早慶戦

強烈なライバル意識と深い友情の両校







早稲田と慶応。

昔から事あるごとに、この両校は、比較されてきました。早稲田と慶応の間には強烈なライバル意識があり、それは学問、芸術、政財界、スポーツ界など様々な分野に及んでいます。

特にスポーツ界ではあらゆる競技に早慶戦があり、毎年、両校の選手がしのぎをけずっているのをご存知でしょうか？　神宮球場で行なわれる大学野球だけが早慶戦ではありません。

バドミントンも同様です。

毎年7月の東日本選手権大会を終えると、両校の部員は9月に行なわれる年一回の早慶戦に向け、フル回転し始めます。

早稲田、慶応にとって、この一戦は意地でも負けられない試合であり、メンバーに選ばれることは、非常に名誉なことなのです。

それゆえ、早慶戦にかける部員の情熱はひとしおで、部内での競争も、シビアなものとなります。

試合は大学男子が5複10単、大学女子と高校が2複3単の対抗戦で行なわれますが、毎年試合が近づくと、メンバーの座をめぐって悲喜劇が展開されます。

しかし試合当日は、試合に出場する者もしない者も関係なく、打倒早慶を悲願に全力を尽くすのです。リーグ戦とは違った一種独特の雰囲気があります。

今年で早慶戦は28回を数え、この間に両校は多くの名選手を輩出してきました。早稲田からは、第23回インカレ複2位の三上・本間組、28回複2位の小中・茶谷組、慶応からは、1、2、3、5、6回複では、広田、岡、越川、石田選手らが優勝、13回単優勝の宮永選手等等。

早稲田と慶応は、強烈なライバル意識と同時に、深い友情によって結ばれています。その両校が持つ共通の願いが一つあります。

それは、早慶戦が事実上の全日本学生王座決定戦となることです。

今年度の定期戦は9月14日、早稲田大学記念会堂にて行なわれ、成績は次のとおりでした。

▼男子戦
早稲田10―5慶応（5複10単）

▼女子戦
早稲田2―3慶応（2複3単）

▼高校戦
早稲田1―4慶応（2複3単）

▼OB戦
稲門クラブ2―6・3引分け三田クラブ
（11複・2ゲーム制）

◆通算成績
男子戦・早稲田16―12慶応
女子戦・早稲田15―10慶応
高校戦・早稲田5―13慶応
OB戦・早稲田9―15・3引分け三田ク
稲門ク

（慶応義塾大学主務・黒沢毅一郎記）

出版案内

バドミントン界編集部

お申込みは巻末とじ込みの振替用紙で、お近くの郵便局からどうぞ

ガッツ・バドミントン

オールジャパン男子シングルスでＶ８をなしとげた日本最強の〝ガッツ〟小島が、そのすべてをさらけ出した書。日本図書館協会選定図書――!!



限りなき挑戦

小島一平著

勝利へのガイドブック!!

好評発売中!!

菊倍判（225ミリ×295ミリ）

定価2000円（送料350円）

〈本書の内容〉

第Ⅰ部　体当たり半生記

１バドミントンとの出会い／２トップ・プレーヤーと接する／３オールジャパンを制す／４限りなき挑戦

第Ⅱ部　実戦アドバイス

１方法よりも意欲だ／２体力づくりに近道はない／３より速く、より高く、より前で

第Ⅲ部　わがライバルたち

１日本最高のシングルス・プレーヤー（秋山真男）／２団体戦に燃えた男（本間順次）／３夢ではない〝世界一〟（銭谷欽治）／４もの静かな全英チャンピオン（タン・アイク・ハン）／５デンマークの暴れん坊（スヴェン・プリ）／６史上最強の天才プレーヤー（ルディ・ハルトノ）

第Ⅳ部　主要大会記録・ルール

トマス杯大会／ユーバー杯大会／全英選手権大会／デンマーク・オープン大会／世界選手権大会／全日本総合選手権大会／競技規則／審判用語

★連続写真：小島一平、銭谷欽治、中井基夫、長谷川博幸、西山博司による11フォームを収録!!

★著者紹介★

小島一平（コジマ　イッペイ）は、神奈川県立緑ケ丘高校、中央大学卒。高校時代はインターハイ・シングルス2位だったが、大学に入ってからメキメキ実力をつけ、昭和41年から昭和50年の間に、オールジャパン・シングルス優勝８回、同ダブルス優勝４回という、わが国最高の記録を残している。全英選手権でも単複３位のほか、デンマーク・オープンでは単複に優勝している。

ヨネックススポーツを経て、現在はラケットショップ元町常務取締役。

出版案内

バドミントン界編集部

お申込みは巻末とじ込みの振替用紙で、お近くの郵便局からどうぞ

スターティング・バドミントン

バドミントン史上最強の天才女子プレーヤーが、その体験をもとに、初心者・中級者向けにわかりやすく、具体的に解説した入門書の決定版——!!



★著者紹介★

ジュディ・ハッシュマン（Judy Hashman）は、アメリカを代表して20年間も第一線で活躍したJ・F・デブリンの娘として生まれる。全英選手権において、シングルス優勝10回、ダブルス優勝7回をとげている。また、アメリカ代表選手として14年間活躍、全米オープンでは単複にそれぞれ12回も優勝している。

これから始める人へ

ジュディ・ハッシュマン著

後藤忠弘訳

すぐに役立つ決定版!!

好評発売中!!

指導者のハンドブック

B５変形判（182ミリ×205ミリ）

定価1200円（送料250円）

〈本書の内容〉

1　ラケットを持つ前に

バドミントンは楽しい／投げる力が基本／さあ、コートに出よう ほか

2　ストローク入門

ラケットの握り方／バックハンドのグリップ／スナップを十分にきかせる／ラケットの振り方／バックスイング／フォワード・スイング／フットワーク／ストロークを身につけるための練習／ネットプレーのための練習

3　クリアーとドロップ

クリアー／オーバーヘッドの場合／アンダーアームの場合／ドロップ・ショット ほか

4　サービスの基本と上達法

ハイ・サービス／ハイ・サービスのテクニック／ショート・サービス／打点は高く、フライトは低く／その他のサービス ほか

5　バックハンドを身につける

アンダー・バックハンド・ストローク／ハイ・バックハンド・ストローク／ハイ・バックハンドのコツ／バックハンドを練習する時のポイント ほか

6　ウェアと用具

用具の四原則／シューズ／上着／ラケット ほか

7　ネバー・ギブアップ

準備にベストを尽くす／自分が苦しい時は相手も苦しい／「もし……すれば」は禁物／目に見えない敵に勝つ／いくつもの練習を組み合わせる ほか

8　集中力と精神力

〝勝つ〟信念が勝利をよぶ／チャンスのくるまで粘りつづける／目標をしっかり持つ／〝読み〟のできるプレーヤーに／未知に排戦する喜び ほか

9　コンディションの調整

うまくなるための要素／ランジングの練習／実行あるのみ／スタミナのもとは食事 ほか

10　パターン練習

練習は試合以上のものを／精神のスタミナを／ハッシュマン式パターン練習／半面練習 ほか

11　基本的な戦術

シングルスの戦術／サービスに安定性を／高度なことはやらなくてよい／タテにゆさぶる／ダブルスの戦術／一にも二にも攻撃／苦しくても〝考えた配球〟を ほか

★日本の実情に合わせて椙野尾昌一・悦子夫妻が**ワン・ポイント・アドバイス!!**

★**連続写真**：ルディ・ハルトノ、リム・スイ・キン、バデュコーン・プラカシュ、スヴェン・プリラフォームを収録して、さらにわかりやすくなっています!!



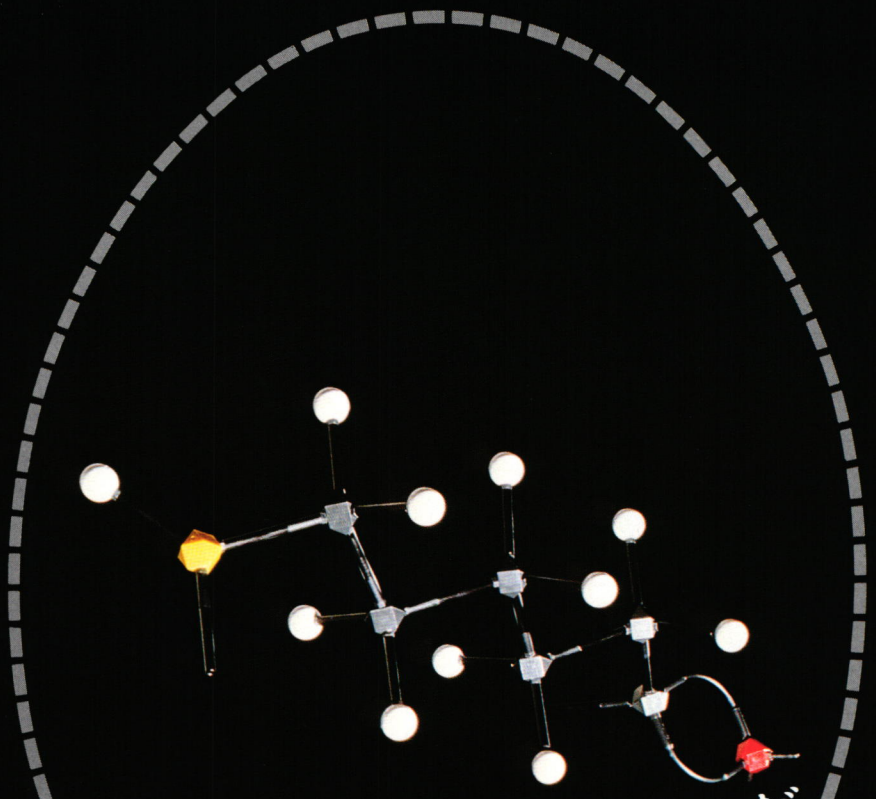
いま、鮮烈のプロショップ

RACKETSHOP
Motomachi

ラケットショップ元町

◉横浜 Tel：5F/045-651-2020・045-662-9857 4F/045-662-7133◉渋谷Tel:03-400-7390◉池袋
Tel:03-988-0215◉吉祥寺Tel:0422-21-7890◉藤沢Tel:0466-26-2552◉町田Tel:0427-28-6050

ザ・サイエンスガット。



科学がガットに生命を吹き込んだ。



ハイ・オー・シープ
¥700

ハイ・シープ
¥450

ウインテックス・カーボン
¥800

ゴーセンが生んだインターナショナルブランド、ハイ・シープ®。ナイロンガットの可能性を徹底的に引きだした、ひとつの頂点。打球感、反発力、耐久性、コントロール性。極限を超えた、科学の結晶。ナイロンガットではない、これはもうサイエンスガットだ。トップブランドとしての誇りを持って、コートの上で暴れ続ける。
さらに、ハイ・シープ®の技術力をベースにしたサイエンスガット群が、バドミントン界を震憾させる。
破壊力ある豪快なショットを可能にするウインテックス®・カーボン。
特殊油入り中空糸とワイヤー巻きつけの技術が生んだ驚異の瞬発力を持つガットなど……。
個性光って、10タイプ。すべてのガットに、科学が生命を吹きこんでいる。
コートの上でその生命力は爆発する。実感して欲しい。

★ガットのGOSENの文字をお確かめのうえお買い求めください。

道具がプレーを変える

GOSEN

株式会社 ゴーセン
本　　社 ● 〒540 大阪市東区農後町4　☎ (06)942-5816代
東京支店 ● 〒111 東京都台東区蔵前4-14-2　☎ (03)862-6576代
福岡営業所 ● 〒810 福岡市中央区薬院1-4-8　☎ (092)712-5247代
北陸営業所 ● 〒921 石川県金沢市横川7-22　☎ (0762)47-0200代

ずらり、4店勢揃い。

渋谷店

760㎡（230坪）の広々とした店内でゆったりショッピング。

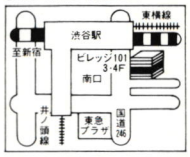


バドミントンコーナー



毎月曜日定休

東京都渋谷区桜ヶ丘町1-7（ビレッジ101ビル3-4階） TEL03-464-9251～2〒150
●営業時間/午前10時～午後7時30分
●日曜・祭日は午後7時まで

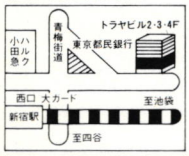


新宿店

落ち着いた雰囲気でお買いもの。各階それぞれの楽しさがいっぱい。

毎月曜日定休

東京都新宿区西新宿7-10-20（トラヤビル2・3・4階） TEL03-363-6848〒160
●営業時間/午前10時～午後7時30分
●日曜・祭日は午後7時まで







バドミントン・フロア

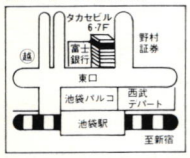


池袋店

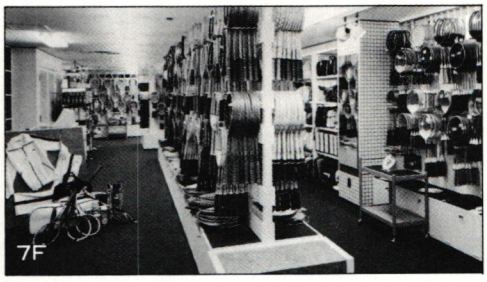
つぶ揃いのテニス、バドミントン用品が店内にあふれんばかり。

毎月曜日定休

東京都豊島区東池袋1-1-4（タカセビル6・7階） TEL03-989-0401〒170
●営業時間/午前10時～午後7時30分
●日曜・祭日は午後7時まで

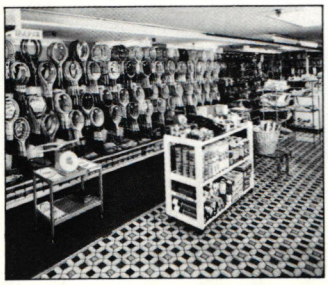






横浜店

ラケット、ウェア、シューズ……すべてに豊富な品揃え。選びやすい各コーナー。



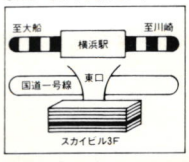


男性ウェア・コーナー



年中無休

横浜市西区高島町2-1 横浜駅東口（スカイビル3階）TEL045-453-1785〒220
●営業時間/午前10時～午後8時
●日曜・祭日も午後8時まで

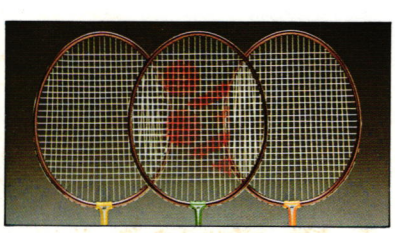


日本最大のテニス・バド専門店
WINDSOR RACKET SHOP

信頼のマーク WINDSOR ウインザー ラケットショップ。

リム・スイ・キング
Liem Swie King
'78・'79全英バドミントン選手権チャンピオン

こめ。」



YONEX®



リム・スイ・キングの片腕。ヨネックス。

全英バドミントン選手権シングルス2連勝。ワールドカップ'79・'80、これも2連勝という実績を誇るリム・スイ・キングとヨネックスががっちりと手を結んだ。今、私の手のなかにあるのはヨネックス。まさに片腕。勝つ自信がますますわいてきた。と語るリム。フルカーボンシャフト。特殊アルミ合金フレームの超軽量ラケットB-8500にすっかり惚れこんでいる。ラケットは軽くするとヤワになるという常識を破り、超軽量100g以下という驚くべき記録をたてたヨネックス。勝者リム・スイ・キングと組んでますますコートのスターを独占。

B-8500 FULL CARBON SHAFT RACKET
Carbonex8

〈カーボネックス・エイト〉‥色／イエロー・オレンジ・グリーン
重量表示／U(99g～95g) 2-U(94g～90g)

ガッツ&フェアープレー賞を受賞して

読者の皆様もすでにご承知のとおり、本誌では学生界から日本を代表する選手が育つように期待して「ガッツ&フェアープレー賞」を贈っています。

この賞は、春・秋のリーグ戦において、個人プレーに走ることなく、フェアープレーに徹し、気迫あふれるプレーでチームを勝利に導いた選手に贈られるものです。

関東大学秋季リーグ戦では、上原明（中央大学4年）、藤井良子（日本体育大学4年）の二人が1部から、そして2部からは、加藤博（明治大学2年）、山本美津子（筑波大学4年）の二人がそれぞれ選ばれました。

その感想をご紹介します。



上原　明

連続優勝で二重の喜び

上原　明

春に続き秋季リーグ戦優勝と共に、この賞を受けられたことは光栄なことだと思う。

学生生活最後の年ということで、主将の座につき年頭の目標として、春秋リーグ戦・インカレ優勝を胸に、部員一同、日夜練習に励んだことが、春秋リーグ戦優勝に導いたものと信じている。

今季リーグ戦においては、途中からシングルス、ダブルス共に主軸の西山を欠き、苦境に立たされたが、後半の対日体大戦、対法大戦ではトップシングルスに続き、第2シングルスもポイントを稼ぐという良い展開となったり、パートナーを2年生の細谷に変えての出場ではあったが、期待どおりの働きをしてくれた。また、安定した力を終始見せてくれた宮本・吉村組の活躍も大きいものだった。

しかし、何よりも部員一同、一丸となって試合に臨んだことが、リーグ戦優勝へとつながったものだと信じている。その延長として、この賞を受けることは私にとっても本当に嬉しいことである。

目の前にあるインカレも春秋リーグ優勝の勢いと共に団体戦・個人戦のタイトル獲得に全力を注ぎたいと思う。

お嫁に行くときも持って

藤井良子

ガッツ&フェアープレー賞という、とてもすばらしい賞をいただく事ができて、とても感激しています。やはりこのようなすばらしい賞がいただけたという事は、いつも応援に来てくれた人達メンバーみんなのおかげだと思います。私にはもったいないような気がしますが、やっといただいたもの——。素直に受けとらせていただきます。

賞をいただいた事により、何か少しでも自分にプラスになったような気がします。せっかくいただけた賞を無意味にする事なく、これからもまた次の試合のために、原点に帰ったつもりで毎日練習していきたいと思っています。

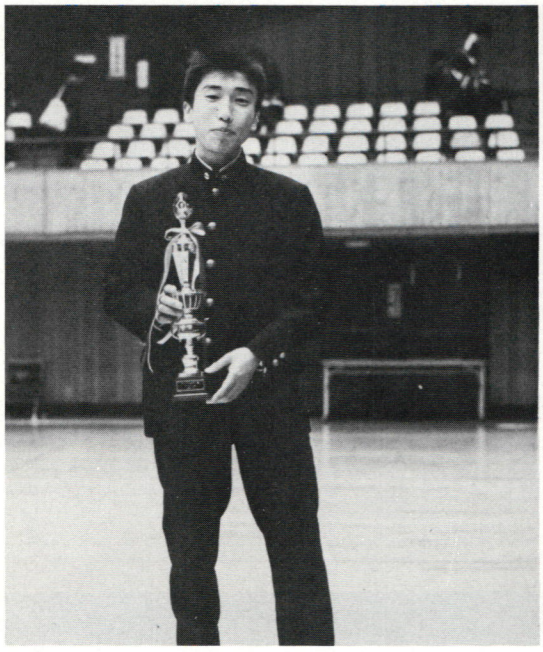
後輩の皆さん！このようなすばらしい賞をいただくためにも、チームの一員である事を忘れないで練習してほしいものです。まずはチームの雰囲気づくりからだと思います。頑張れガンバレ、後輩の皆さん！

大学生活最後にして、このようなすばらしい賞本当にありがとうございました。

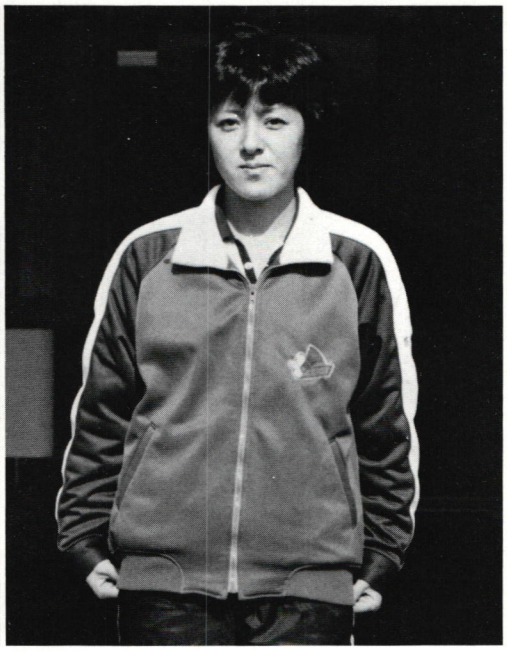
すばらしいトロフィーお嫁に行く時もって行こうかな～～～



プレー中の藤井選手



加藤　博



藤井良子

また新たな気持で

加藤　博

春のリーグ戦では優勝を意識しすぎ、我が校は実力を発揮できぬままに終わってしまいましたが、今回のリーグ戦は、全員が無欲で戦い、その結果優勝することができました。

そのうえガッツ&フェアープレー賞までいただくことができ、大変うれしく思います。自分がこのような名誉ある賞をいただくことができたのは、決して自分一人の力ではなく、チームの皆様のおかげだと思っています。



山本美津子

まだまだこれからだ

山本美津子

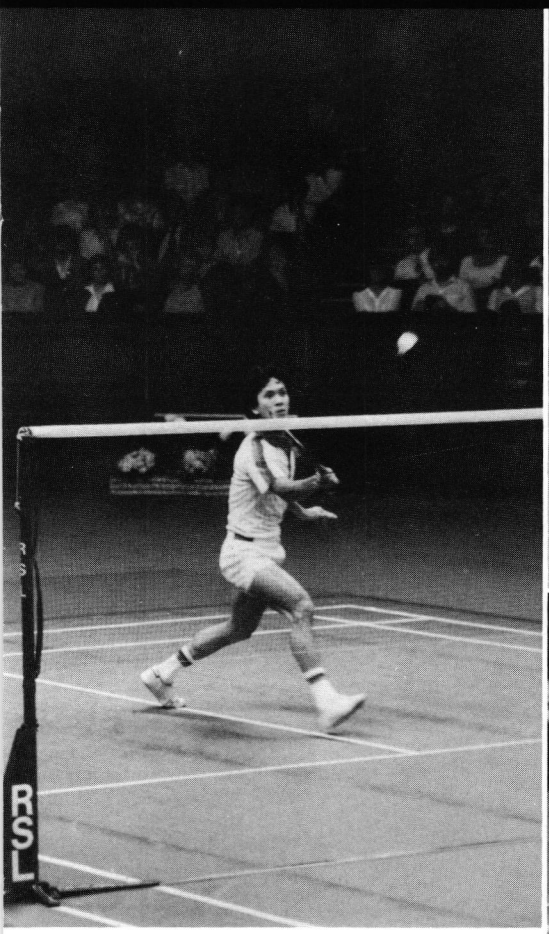
今回のリーグ戦を最後に、主力である4年生が抜けてしまい、来シーズンからは新メンバーで戦うことになりますが、また新たな気持ちで、よりいっそう努力したいと思います。

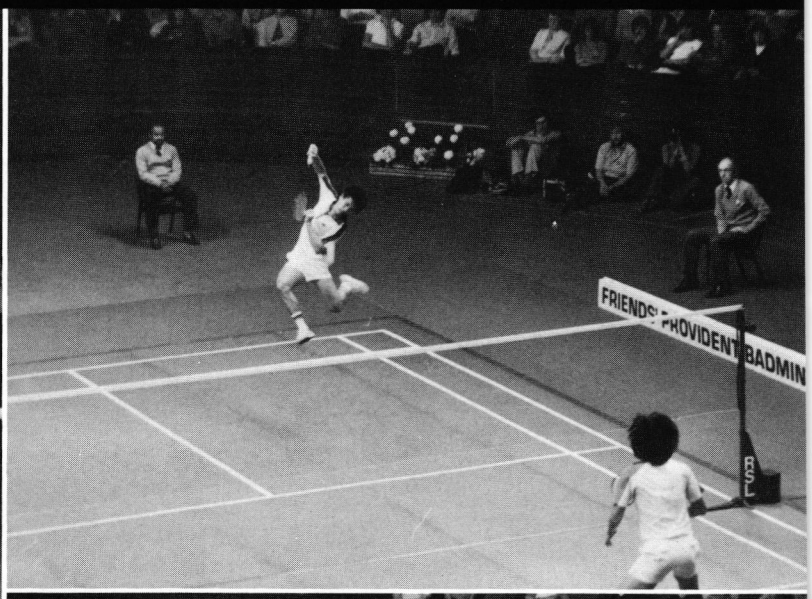
関東大学秋季リーグ戦でガッツ&フェアープレー賞をもらったことは、うれしいけれど、同時に、何かピリオドを打たれたような気がする。確かに私にとっては最後の関東大学リーグ戦だったけれど、今年の試合もまだ残っているし、私のバドミントン人生は、もちろんこれからの方が長いだろう。なぜ、そんな気がするのかわからない。でも気がついてみたら、学生生活はあと半年も残っていなかった。

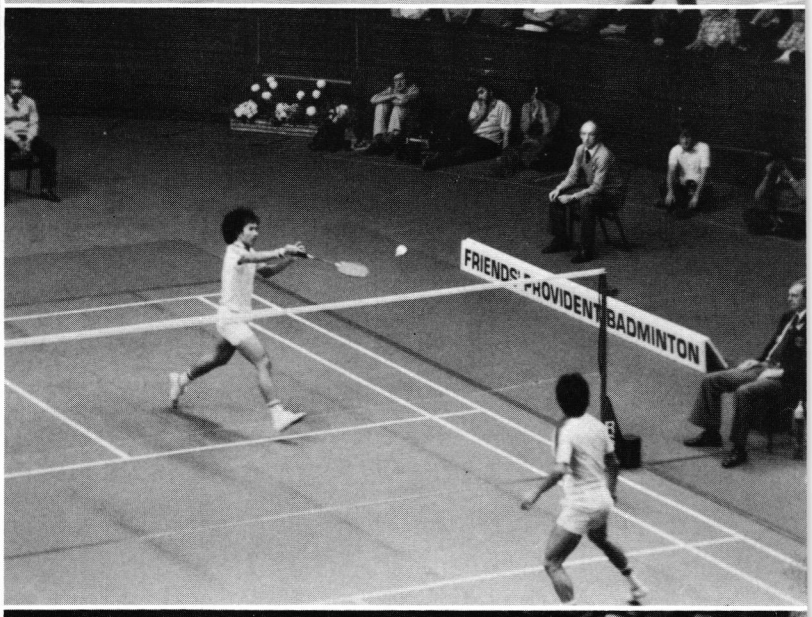
今ここでこの4年間をふり返ることは簡単だけど、まだ今はふり返りたくない。このまま、あと半年間をせいいっぱいやりたい。まだ何も終っていない。たとえあと半年たっても、何も終りはしない。でも私は、あと半年たって、卒業する時、コンマを打って、4年間をふり返ろう。これから先のためにも。その時の、そのコンマのようなものとして、この賞も今はまだ手にふれないでおく。

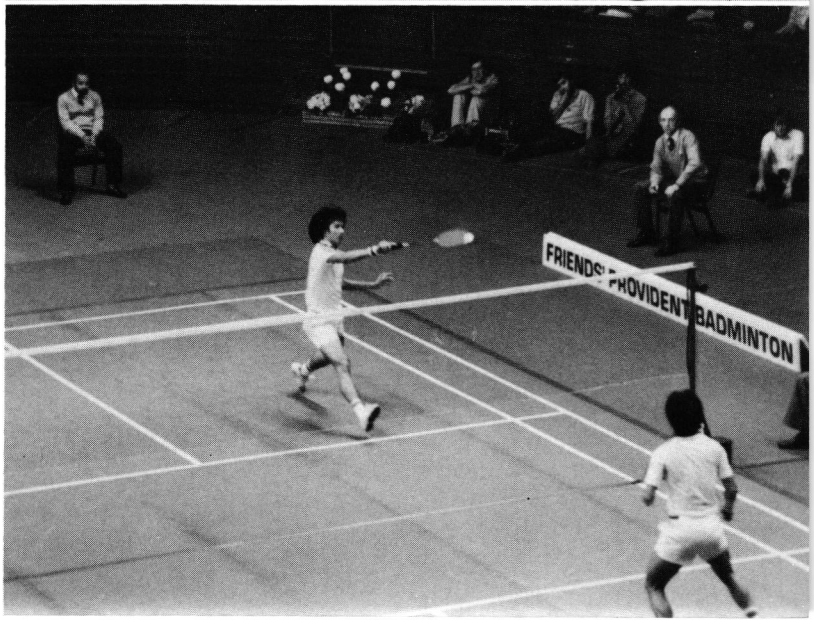
筑波大学もようやく1部に昇格した。思えば長い道のりだった。けれどまだこれからだ。次の目標はもうわかっている。これからの方がまだ長いかもしれない。すべてこれからさ。でも、よくきたなあ、本当に。私が大学に入ったときは、12部にいたんだもの。

第2回マスターズ・トーナメントから　*Gentlemen's Singles*



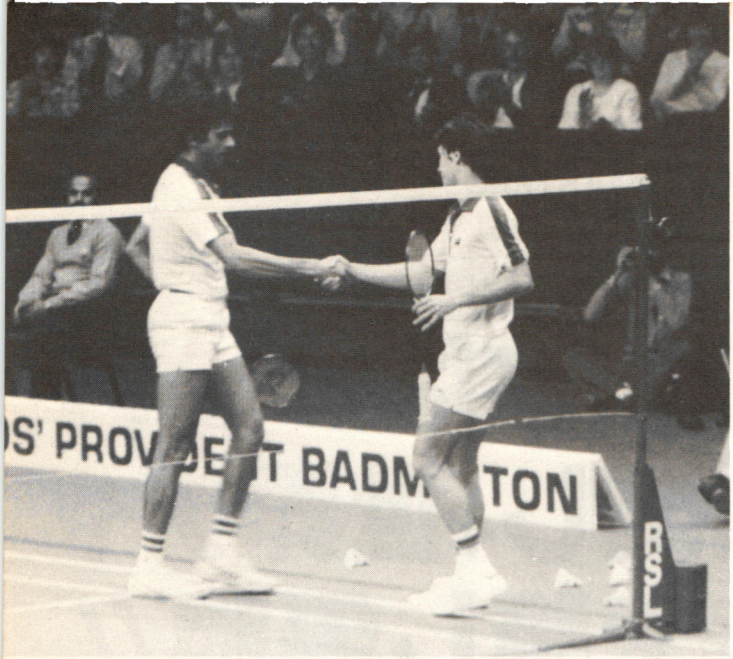




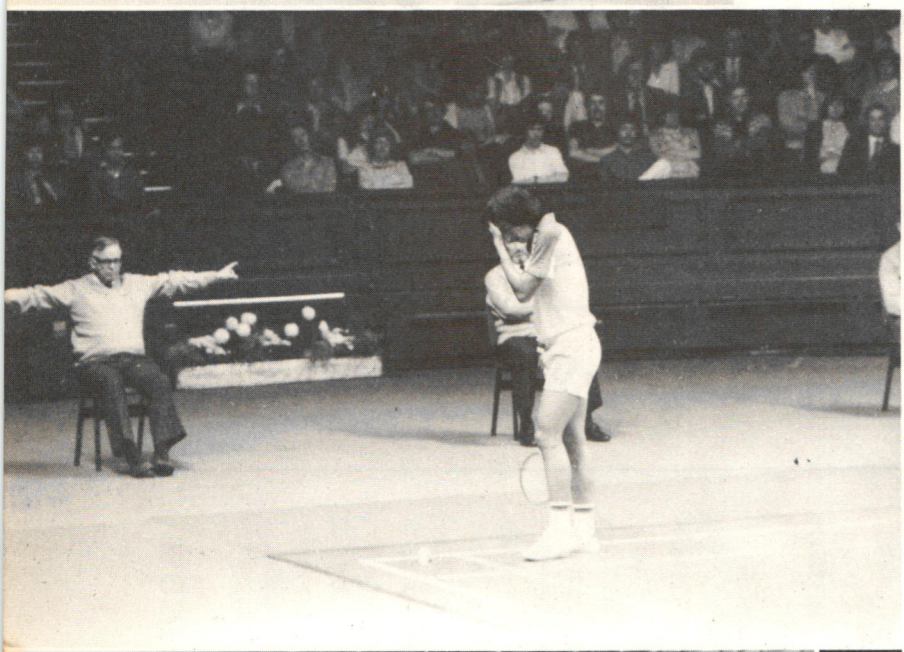


夢の対決ふたたび

中国を除けば、現在考えられる最高の対戦となったルディ・ハルトノ〝ザ・グレーテスト〟と〝人間速射砲〟リム・スイ・キンの決勝は満員のファンを興奮させた。スコア的にはリム・スイ・キンの一方的なストレート勝ちだったが、リム・スイ・キンは絶好調を思わせるジャンプ・スマッシュを放ち（右上）、一方のハルトノも、すばやいラッシングからスピンのきいたヘアピンで、リム・スイ・キンを悩ませ（右中、右下）、要所要所で〝神様〟ぶりを発揮した。

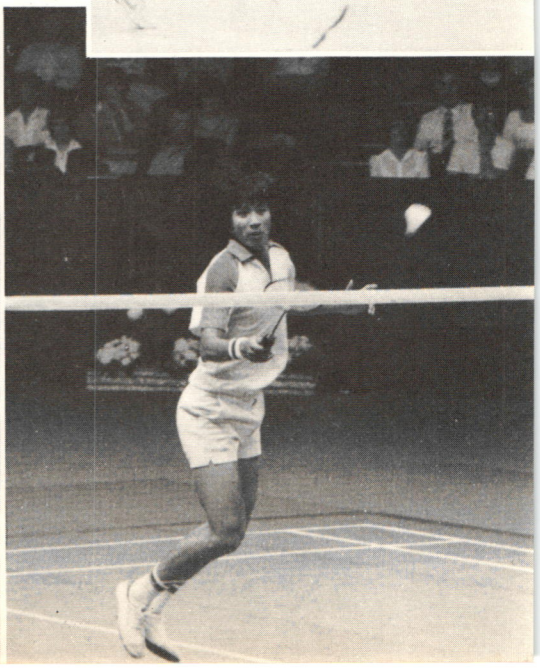


全英選手権で苦杯を喫しているパデュコーン・プラカシュに対し、リム・スイ・キンはペースをうまく配分し、雪辱に成功した（左上）。ハルトノに挑戦したモルテン・フロスト・ハンセンは、第1ゲーム大きく引き離されたが第2ゲームはよく食い下がった（右上）。ハルトノはハンセンのねばりに手こずり、アウトボールを選球し、ヤレヤレとばかりにひたいの汗をぬぐった（左中）。しかし，勝負どころでは、するどいダッシュで、スピンのきいたヘアピンを決め、ストレート勝ちを収めた（右下）。満員の観衆は相次ぐ好試合に大喜び（左下）。









THE 2nd FRIENDS' PROVIDENT MASTERS TOURNAMENT, Royal Albert Hall, London

第2回マスターズ・トーナメント・ロンドン・9・23~27

米倉・徳田組 すばらしいゲームを展開し、世界チャンピオンペア降し優勝!!



山本洋彦（文・写真）

リム・スイ・キンは〝神様〟ハルトノにストレート勝ち

コーペン〝女王〟を死守

夢のビッグ・イベント

どれをとっても素晴しい試合の連続だった。世界各国から男女各8名のチャンピオンを招いて開かれた、第2回マスターズ・トーナメントは9月23日から27日までの5日間、ロンドン市内において行なわれ、昨年にひきつづき、またしても満員の観衆をロイヤル・アルバート・ホールにひきつけた。

大会前、新聞は次のように報じた。

「ルディ・ハルトノは、今回優勝をねらい、それをお土産に引退する」と。

これによって、いやが応でもハルトノ対リム・スイ・キンの大決戦のおぜんだてをし、この二人にパデュコーン・プラカシュがどのようにからむか？

全英チャンピオンのリーン・コーペンの王座をおびやかすのは誰か？

チュンチュン・ワジュディ組が参加しない男子ダブルスの栄冠は？

そして世界チャンピオンで地の利を十分に生かして、その地位を不動のものにしようとするノラ・ペリー、ジェーン・ウェブスター組に対して、ベラワティ・ウィハルジョ、イメルダ・ウィジョノ組が〝借り〟を返せるか？

今回から加えられた混合ダブルスでのマイク・トレジェット、ノラ・ペリー組対クリスチャン・ハディナタ、イメルダ・ウィジョノ組の対戦はどうなる？

そして、来年5月のユーバー杯防衛戦に向けて着々とコンディションづくりを進める我が日本チームがどんな戦いぶりを示すか？

トマス杯、ユーバー杯、世界選手権、全英選手権、ヨーロッパ選手権など、ほとんどすべての選手権大会の準決勝・決勝のダイジェスト版ともいえるこのマスターズ・トーナメントは、第2回目を迎えて、いよいよ定着化・白熱化してきた。

毎日が好カード

この大会の特色は、参加選手をシングルスは4名1組のグループに分け、それぞれのグループの勝者同士が決勝を争い、ダブルスは4ペアが総当りでリーグ戦式に戦い、上位2組を再度決勝で戦わせる方式をとっているため、どの試合をとっても

それなりに興味津々ということができる。

たとえば第1日目の第3試合では、いきなりペリー・ウェブスター組対ベラワティ・イメルダ組という、ジャカルタでの世界選手権決勝の再現というように、主催者側の言葉を借りれば、「後半だから面白い、前半だからつまらないということは決してありません。最初から最後までどれをとっても、世界最高レベルの試合が見られます。いつでもご都合のよい日においでください。きっと満足いただけます」

というキャッチ・フレーズになるわけである。

湯木突然の発熱

さて第1日は、ヨーロッパ・チャンピオンでそして大試合には初登場ともいえるスイスの新星、リーサロッティ・ブルーマ対コーペンの女子シングルスでスタート。男女シングルス各2試合、女子ダブルス、混合ダブルス各1試合の合わせて6試合が行なわれた。

前回チャンピオンで全英チャンピオンのコーペンはブルーマを、そしてプラカシュはフレミング・デルフスをともに2—0のストレートで降した。

リム・スイ・キンもステューア・ジョンソンを、混合ダブルスではクリスチャン・イメルダ組がステーン・スコブガード、コーペン組を破って順調なスタートを切った。

出場予定だった湯木博恵が突然の発熱で欠場、ピンチヒッターとしてシングルスに出場することになったウェブスターは、米倉よし子を相手に堂々たるゲームを展開、12—10、11—6のストレートでポイントをあげた。

そしてこの日の圧巻は、世界選手権女子ダブルス決勝の再現、ペリー・ウェブスター組対ベラワティ・イメルダ組の対戦である。

第1ゲーム15—13で先取し、第2ゲームも7—3とリードしていたイングランド・ペアは、12オールから12—13と逆転され、セッティングの後17—15のリードでのマッチポイントも逃し、17オールと追いつめられた。

しかし、インドネシア・ペアはここで得点を意識しすぎたのかプレーが硬くなり、結局は18—17の1ポイント差でイングランド・ペアが取り、ジャカルタについで2連勝。

勝因はやはり、ペリーの好リードがウェブスターのサウスポー特有の好ショットをひきだしたことといえる。

LSKは安泰

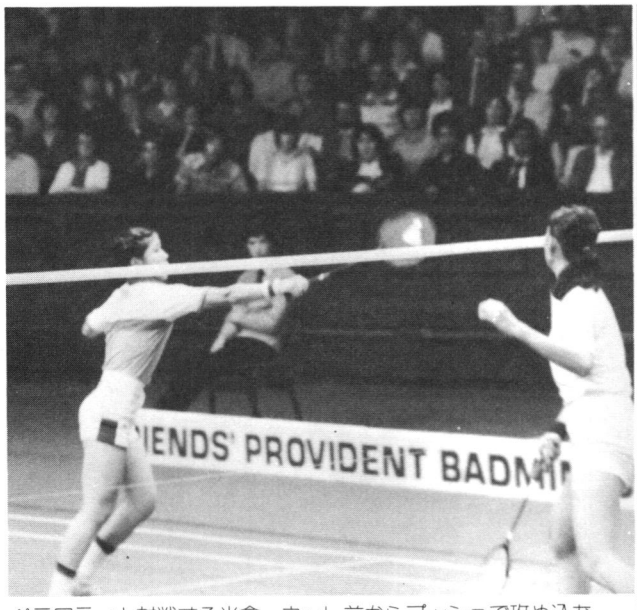
第2日目からは、午後の部6試合、夜の部6試合が行なわれた。

午後の部でプラカシュが34歳のベテラン、ジョンソンに15—11、9—15、11—15で不覚にも敗れる波乱があったあと、注目のハルトノが登場した。

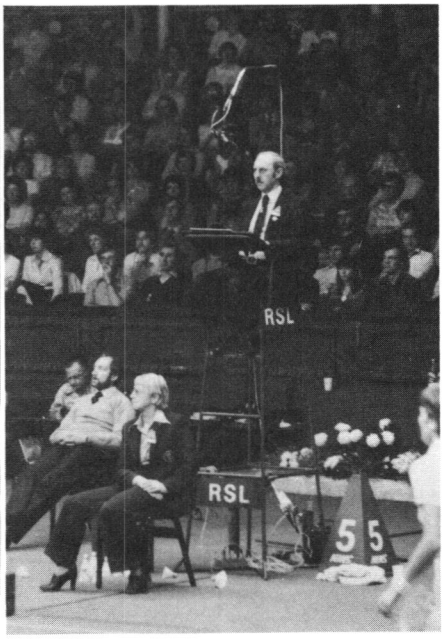
トーマス・キールストロムに対し、第1ゲーム18—17というスリリングな試合を展開したが、第2ゲームは15—6でかんたんに取り、優勝をねらう意気込みをみせた。

ペリー・ウェブスター組対米倉・徳田組の実力ペアの対戦は、イングランド・ペアが前夜の好調の波に乗るかにみえたが、日本ペアがそれを上回った。

第1ゲームこそ10—12からセッティングの18—16で先取する苦しい戦いとなったが、第2ゲームはがっちりと15—4で完勝し、さい先の良いスタートとなった。



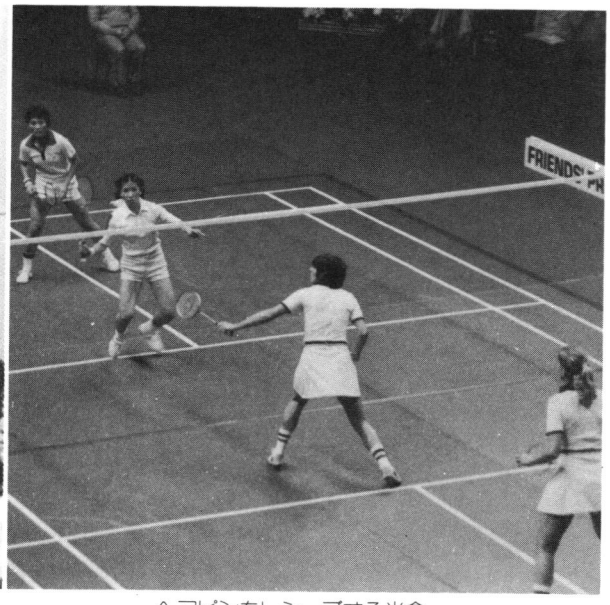
ベラワティと対戦する米倉。ネット前からプッシュで攻め込む



本場だけに権威は絶対的。主審、サービスジャッジの表情も厳しい



スタンド選手席の日本トリオ。
単複に好調の米倉は明るい表情



ヘアピンをレシーブする米倉

㊚子ダブルスのスティーブンス・トレジェット組対デルフス・スコブガード組は、長身ペアのデンマーク・チームが打ち勝った。

混合ダブルスは地元のビリー・ジリランド、カレン・チャップマン組が、クリスチャン・イメルダ組から第1ゲームを先取するという大健闘をみせた。しかし後がつづかず、2―1でインドネシア・ペアが勝った。

夜にはいり、第1試合で近藤小織は、インドネシアのホープ、イバナ・リー・イン・ホーと対戦したが、ストレートで屈し、高田幹子と組んだダブルスでもベラワティ・イメルダ組に、フアイナル・ゲームまでもつれこんだがあと一歩及ばず、片目をあけることができなかった。

リム・スイ・キンはデルフスを15―2、15―5の大差であっさりと破り、グループDでの2試合に連勝し、ますます快調。

この日を終了して、プラカシュが脱落したのを除いては大きな波乱もなく、第3日目へ。

三つどもえの女子複

㊐点争いも激しくなってきた第3日目。

男子シングルスは、グループDでリム・スイ・キンが2戦全勝のため、1勝1敗で並ぶ他の2選手にくらべ圧倒的優位。

グループCは、ハルトノがモルテン・フロスト・ハンセンを倒せば3戦全勝で決勝へ進むことになる。しかし、ハンセンが勝てば行方はこんとんという状態だったが、このハルトノ対ハンセンの試合は4日目の夜の部に組まれているため、最後のギリギリまでわからない。

㊛子シングルスは、グループAで米倉が世界チャンピオンのベラワティといかに戦うかがカギとなる。一方のグループBは、コーペン対イバナの勝者がグループ優勝となる公算が大きい。しかし、いずれも4日目の夜に組み込まれている。

男子ダブルスは、この時点では予想の立てられない状態。女子ダブルスは、米倉・徳田組がペリー・ウェブスター組を破っており、ペリー・ウェブスター組はベラワティ・イメルダ組を撃破しているため、米倉・徳田組対ベラワティ・イメルダ組の結果いかんとなる。

米倉組が勝てば決勝進出だが、もし敗れれば、この3組が三つどもえとなってしまう。このあたりが、マスターズの興味深いところであり、特色でもある。

ハルトノ逆転勝ち

㊏て、その第3日目が始まった。

近藤はコーペンにさしたる抵抗もできず、3―11、5―11で完敗。

デルフスが15―10、15―9でジョンソンを一蹴したあと、ベラワティがウェブスターを11―6、11―9でおさえ、いよいよハルトノの登場。

相手は地元イングランド・ナンバー1のスティーブンスとあって、地元ファンは大歓声を送った。

そしてその声援にこたえるように、スティーブンスは第1ゲームを先取した。しかもこのゲームは5―14とゲームポイントをハルトノに取られながらの大逆転劇だけに、場内の興奮もまた大変なものとなった。

しかし、攻撃につぐ攻撃で第1ゲームを取ったスティーブンスはスタミナを消耗しつくし、第2、第3ゲームはまったくハルトノのペースとなり、15―7、15―4と大差に終ったのは残念だった。

午後の部の残る2試合は混合ダブルス。

スコブガード・コーペン組対ジリランド・チャップマン組、クリスチャン・イメルダ組対トレジェット・ペリー組の対戦。いずれも地元ペアは勝てないだろうというのが公平な見方だったが、いざフタをあけてみると、大誤算。

ジリランド組は、このような大試合初登場にもかかわらず、のびのびとプレーし、思い切りもよく、老練なスコブガード組を向うに回して大健闘した。

1ゲーム目11―15で落とし、第2ゲームも12―13となり、もはやこれまでと思いきや、18―13と逆転に成功した。ファイナル・ゲームも勢いに乗って15―11と押し切った。スコブガード組は、貴重な一戦を失った。

クリスチャン組に挑戦したトレジェット組も1ゲーム目を10―15で失いながら、続く2ゲームを15―0、15―2というまったく不可解なスコアで連取した。

これで、混合ダブルスもまた優勝の行方がこんとんとしてきた。

混合複に新星

夜の部にはいっての第1試合で、米倉はイングランドのカレン・ブリッジと対戦した。

米倉は今年の全英選手権準々決勝で2―1のスコアで勝っている。しかしこの試合第1ゲーム、6―5のリードからブリッジの逆襲を許し、7―10のゲームポイントは2度逃れたが、3度目についに得点され、7―11で先行された。

第2ゲームも一進一退のゲーム展開だったが、今回のブリッジは一段と迫力をつけ、米倉8―9と迫りながら、あと1ポイントが取れず、第2ゲームも8―11で敗れた。

この敗戦は米倉にとって手痛いもので、決勝進出への望みはほとんど断たれたと思われた。

ハンセンは、今回も安定したプレーでキールストロムにストレート勝ちし、いよいよ明日、グループCの優勝をかけてハルトノと対戦することになった。

イバナも同様にブルーマを破って、コーペンとの対戦に全力をあげることとなった。

その後の日本同士の女子ダブルス、そして男子ダブルスの2試合も大きな波乱がなく、第3日目も終了した。

決勝への出場者を決める大切な4日目。

まずウェブスターが同僚ブリッジを12―11、11―4で破り、1勝をあげた。スティーブンスはキールストロムを15―5、18―17で、近藤もブルーマを11―4、11―8でしりぞけ、やっと片目をあけた。

そして、女子ダブルスの決勝進出へ重大なカギをにぎる米倉・徳田組対ベラワティ・イメルダ組の試合が始まった。

ゲームは常に一進一退をくり返し、ファイナルにもつれこんだが、インドネシア・ペアが12オールから抜け出し、15―12で試合を制した。

この結果、米倉組、ベラワティ組ともに2勝1敗となり、ペリー組が夜の部で近藤組に勝っても、これまた2勝1敗というややこしい状況となった。

ついての混合ダブルスは、今大会絶好調で他のペアをおびやかしつづけていたジリランド・チャップマン組が、ついに全英チャンピオンのトレジェット・ペリー組を15―5、15―9で倒す大金星をあげ、優勝戦線へ浮上してきた。

男子ダブルスではステファン・カールソンと新たにペアを組んだキールストロムが、デルフス・スコブガード組に打ち勝った。

米倉決勝へ進む

そして決勝への最後のカギとなるいくつかの重要な試合を含んだ、予選リーグ最終戦が夜6時半から始まった。

まず米倉対ベラワティ。

米倉は落ち着いた試合運びで6―1とリードのあと、いったん自分のミスで6―6のタイに追いつかれたが、すぐ気をとり直して11―6で第1ゲームをものにした。

第2ゲームにはいると、ベラワティに立直りの気配がみられたが、かんしんのところでウィニングショットが、サイドをわずかに割るケースがめだち、また、米倉得意のフェイント気味のドロップショットが効果的に決まり、11―5で連取、世界チャンピオンを倒した。

同時に、ポイント差でわずかながらベラワティを抜き、グループAの勝者として、翌日の決勝進出を決めた。

リム・スイ・キンとプラカシュの激突という全英選手権決勝の再現が第2試合である。

全英選手権のときはリム・スイ・キンが体調不十分でプラカシュに軍配が上がったが、今回はリム・スイ・キンも万全の態勢。

まず第1ゲーム、プラカシュがいつもより攻撃的に打って出て、これがリム・スイ・キンのリズムによく合ってしまい、15―11でリム・スイ・キン先取。

考え直したプラカシュは、第2ゲームにはいると攻撃的スタイルをやめ、ロング・ハイサービス、ハイクリアー、ドロップショット、そして〝ここぞ〟というときだけスマッシュを使う彼独特のオーソドックスなプレーに徹して、15―8で取り、1―1のタイに持ち込んだ。

迎えたファイナル・ゲームは持久戦といった形の展開となったが、リム・スイ・キンは終始リードを保ち、14―9から14―11とプラカシュに追い上げられたが、今回の充実ぶりはプラカシュを上回り、15―11でリム・スイ・キンが全英選手権の雪辱をとげた。

米倉の対戦相手を決めるグループBの最終戦はコーペン対イバナ。デンマーク・オープンでイバナ、全英選手権でコーペン、世界選手権ではイバナと

いうふうに因縁の対決の4度目。

すべり出しからイバナがいきなり8―0とリード。いうまでもなく11ポイントを争う女子シングルスでの8―0はかなりのハンディだが、コーペンはあきらめずに追い上げた。そしてイバナに10―7とゲームポイントを取られながらセッティングにもち込み、結局は12―10で先手をとった。

これで第2ゲームは、すっかりコーペンのペースとなり、11―7で連取、米倉と決勝を争うこととなった。

ハルトノも決勝へ

さて注目のハルトノ対ハンセンの試合は、ハルトノが最初から強烈なスマッシュをあびせて12分たらずの15―6でハンセンを圧倒した。

ハンセンはハルトノのスマッシュをレシーブできずに第1ゲームを失ったかっこうだったが、第2ゲームにはいるとそのスピードにも目がついていくようになり、5―5から6―5とハンセンがリードした。

左右にふるのが無理とみたハンセンは、ハルトノのボディ攻撃に活路を見出して徐々にリードを保ちながら、12―7と有利な展開を維持した。

ここでハルトノは勝負をヘアピンに持ち込み、ハンセンが14―10とゲームポイントをとったあともあと1本を与えず、ジワジワと追い上げ、14オールのセッティングへともつれ込んだ。

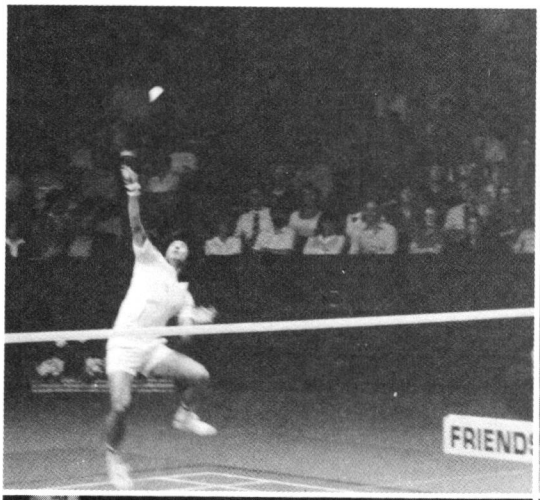
セッティングにはいるやいなや、ハルトノはしばらく出さなかった強力なスマッシュをハンセンのバックハンドに叩きつけ、ついに17―14で降し、いよいよリム・スイ・キンとの決勝という最高の試合を演じることとなった。

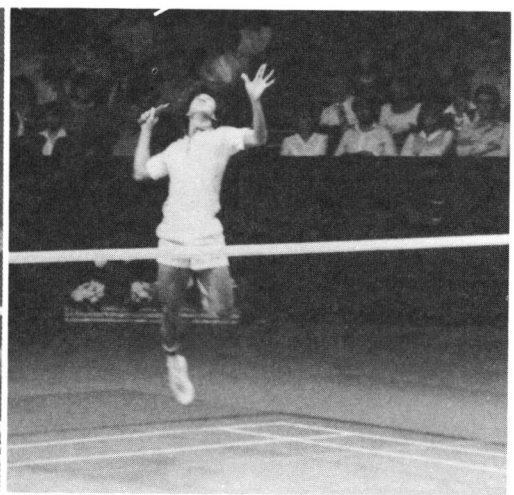
ハンセンも持てる力を出し切って奮闘したが1ゲーム目のちょっとした出遅れが、ハルトノにわずかの余裕をもたせる結果となってしまった。

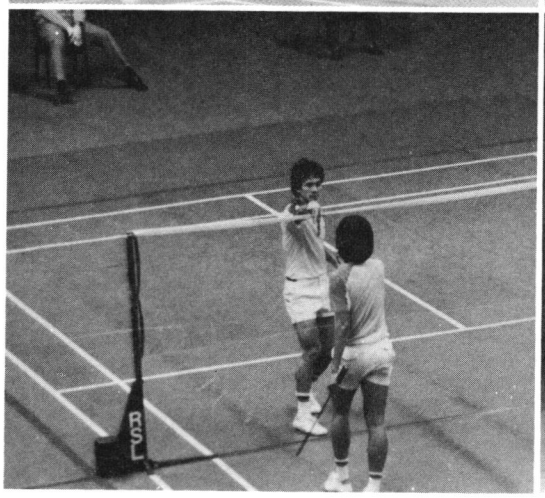
ペリー・ウェブスター組対近藤・高田組は、女子ダブルス・グループ内の最終戦。

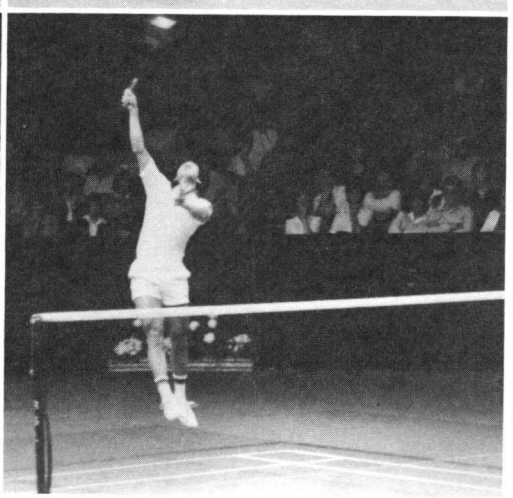
近藤組は何とか1勝をあげたいという意気込みで第1ゲームを打合いの末先取したが、第2ゲーム以降は、その打合いを中間ボール、クロスネットで封じられ、2―1でペリー組の勝ちとなった。

同時にペリー・ウェブスター組は、わずかのポイント差で、









久しぶりにリム・スイ・キンらしいジャンプスマッシュをみせた。心技体ともに充実しきっていたハルトノも積極的に攻撃をしかけた。しかし、リム・スイ・キンの冷静なプレーに屈してしまった

〝ベラワティ・イメルダ組をおさえて、米倉・徳田組と決勝で対戦することとなった。

㊌選リーグ最終試合は、クリスチャン・チャンドラ組対スティーブンス・トレジェット組。金曜の夜であり、地元ペアの登場とあって、時計が10時を回っているのに会場は満員のまま。

そんな雰囲気を察してか、スティーブンスのガッツあふれる強打と、トレジェットのインターセプトによるコンビネーションがさえをみせ、地元ペアが15―10で先取。

スティーブンスは今大会から羽根打ちサービスを使い始め、ややコントロールは甘かったが、一応無難にこなし、第2ゲームへと進んだ。

しかし、クリスチャン組の余裕に対して、スティーブンス組はすでにトップギヤー。坂道にさしかかった車のように、急速にスピードが鈍り、第2、第3ゲームを失い、クリスチャン組がチャンピオンの座をかけて、キールストロム組と戦うこととなった。

コーペン冷や汗

㊍ングルス優勝者3000ポンド（約150万円）、ダブルス優勝ペア1500ポンド（約75万円）の賞金をかけて、第2回マスターズ・トーナメントは1時ちょうど、コーペン対米倉の間でラブ・オール。

午前中軽く汗を流し、試合前にぎりめしを少しほおばった米倉は、「よし、これで動ける」と気合い十分。

第1ゲーム3―6の劣勢からよくねばって9オールのセッティングに追いつき、そのあとコーペンのわずかの気のゆるみをついて3本連取、12―9と先行した。

米倉は終始よくねばり、また無理なショットを打たず、コーペンにがっちりついていったのがセッティングののち、あの完璧なコーペンに3本のクリアーミスをさせたということになったのであろう。

しかしその時点で米倉は、かなりスタミナ（精神的な面も含めた）を消耗した表情がみえ、一方のコーペンには若干の余裕がうかがえた。

これが2ゲーム目になってはっきりとプレーに表われ、7―5でコーペンのリードから、米倉が逆転をねらって放った数発のウィニングショットを、まるで待っていたかのように、クロスネット等で切り返し、11―5でコーペンがタイに追いついた。

ファイナルゲームは米倉がリードし、6―5でチェンジエンド。いよいよ終盤である。7―5と米倉リードのあと、コーペンのショートサービスを米倉がリターンミスしたのに始まり、〝ベラワティを苦しめた米倉得意のドロップショットを、コーペンが逆にフロアーすれすれのレシーブでクロスネットして逆転するなどして、コーペンが9―7と大ヅメでリードを奪う大激戦となった。

しかし、米倉のがんばりぶりもこの日はすばらしいものがあり、8―9と追い上げた。

ここでコーペンは、長いラリーのあと、すばらしいクロスのドロップショットをノータッチで決め、もぎとったサービスをマッチポイントにつなげ、いよいよ10―8。

米倉はコーペンをバックコート深く押し込む作戦でクリアーを連発したが、またしてもコーペンにドロップショットを落され、やっとの思いでこれをレシーブしたものの、不運にもネット前に高く上がり、コーペンはこれを逃さず叩いて11―8と、52分間の激戦に終止符を打ち、昨年につづいて2度目のマスターズのタイトルを手にした。

㊎れにしても、米倉の思い切ったクリアー、スマッシュはすばらしく、コーペンも近年まれにみる苦戦をしいられたといえる。

米倉の課題は、試合の流れの読み、ペースの配分といった頭脳的な点であり、個々のショットについては、むしろコーペンを上回っていた。それでありながら、たとえばファイナルゲームの8―9からあと1本でセッティングに追いつくというとき、完全に押し込んでいながら、今まで一度も使われていなかったコーペンのクロスショットにやられてしまったというように、最後の土壇場においても、また数本のエースを放つ余裕・計算をできるかどうかがポイントとなろう。

いずれにせよ、ユーバー杯防衛に向けて、この米倉の戦いぶりは、大きな好材料となることは間違いない。それほど素晴しい内容であった。

〝神様〟敗る

㊐ンドネシア同士の男子シングルス決勝。今年の世界選手権で優勝した世界チャンピオンであるとともに、過去8回の全英選手権優勝というルディ・ハルトノ〝ザ・グレーテスト〟と、78年、79年の全英選手権優勝という〝人間速射砲〟リム・スイ・キンの対戦。中国を除けば世界のトップ二人の激突である。

リム・スイ・キンのロング・ハイサービスを一発目からスマッシュで打って出たハルトノは、4―1、5―2と積極的にリード。リム・スイ・キンはむしろ受け身の態勢でスタート。

リム・スイ・キンのドリブンクリアー、ドライブが1センチでも低くなるとハルトノの長い手がそれをとらえ、守勢から攻撃へと一気に転じるあたりは、ハルトノならではのもの。

また、ドロップショットに対するネット際へのダッシュも、リム・スイ・キンのそれに対して、ハルトノはるかに鋭く、迫力に満ち、そして重要なことは、そのショットがきわめて効果的だということである。

そんな攻撃ひとすじのハルトノを、リム・スイ・キンは8―8でとらえ、10オールと追いつ



カメラマン、選手の前をゆっくりと表彰に向かうハルトノ。これが公式戦最後の姿となるか

かれはしたが、その後ハルトノが極端なほどの単純ミスを3連発、結局17分、15—11のスコアでリム・スイ・キンが先手を取った。

(第)1ゲームをみるかぎり、ハルトノの王者の貫録ありありといったプレーに対し、リム・スイ・キンのおとなしい、しかし正確なプレーが対照的であった。

第2ゲームにはいり、リム・スイ・キンはすべり出しからジャンプスマッシュをみせ、一気にストレート勝ちをねらう気魄をむき出しにしたのに対し、ハルトノも2—6でサービスオーバーを5回もくり返し、反撃の様子をみせた。

しかし、その後6—3でリム・スイ・キンがサービスのときからサービス権の移動がまったくないまま、15—3という1ゲーム目の試合展開からは想像もつかない一方的結果でリム・スイ・キンの手に優勝が渡ってしまった。

(試)合開始から合計30分という二大トッププレーヤーの激突にしてはあっけない幕切れとなってしまった。

結果的には、はじめから打って出てスタミナを使いすぎてしまったハルトノに対し、じっくり守ってゆっくり相手の出方を待ったリム・スイ・キンの作戦勝ちとでもいおうか。

もしハルトノが前評判どおり、この試合をもって引退するとしたら、何ともさみしい終幕であった。

リム・スイ・キンへの称賛の拍手とともに、それ以上に大きな拍手が、この偉大なプレーヤーハルトノに対して惜しみなく、満場のファンから寄せられ、ハルトノはその姿をホールの控え室に消していった。

はたして引退か、あるいはまた突如のカムバックか。それらを裏づける発表、証拠は大会終了までいっさい誰の口からも語られずに終った。

百戦練磨の勝利

(ク)対キールストロム・カールソン組の男子ダブルス決勝。

スウェーデン、ペアは今までキールストロムとベント・フローマン、カールソンはノルディンと組んでおり、今大会は新しいペア。

キールストロムの巧みなレシーブと、カールソンの攻撃力のあるスマッシュがうまくマッチし、百戦練磨のクリスチャン組を最後の最後まで苦しめた。

しかし、レシーブ力にまさるクリスチャン組に十分余裕がみられ、ポイントこそ接近していたが、内容的にはさすがといえるものがあった。

とくにクリスチャンの素晴しいカンをしたレシーブ、そしてインターセプトは何回となくスウェーデン・ペアの攻撃を断ち切り、チャンドラの重いスマッシュにつなげる絶妙のプレーをみせ、健闘するキールストロム組の野望をくだいた。

米倉組みごとに優勝

(日)本のエース米倉・徳田組は地元ペアのペリー・ウェブスター組と決勝を争った。予選リーグでは日本ペアが勝っており、問題はこの日の第1試合でコーペンとファイナルゲームを戦った米倉の出来がどうであるかという点である。

その米倉は、シングルスの疲れもみせず、フォアの奥からバックの奥深くふられたシャトルにも、迷わずとびつき、「ホッ」というかけ声とともにスマッシュを打つ元気さで問題ないスタ

ートを切った。

第1ゲーム、5―2とリードした米倉組は5オールと追いつかれ、その後は1ポイントを争うシーソーゲームとなった。米倉組は中途半端な中間ボールを使わず、思い切ってリターンするときは得点につながっていた。

しかし、リターンが甘くなると前衛のペリーにつかまり、返しきれなくなるという典型的な試合展開。したがって日本ペアにしてみると、いかにウェブスターを前に引き出すか、あるいはペリーが前にいるとき、いかにしてそのインターセプトをかわすかにしぼられた。

13―10で日本ペアリードから、イングランド・ペアもがんばり、13オールのセッティング。ここでペリーが安易なミスをくり返し、これに助けられて18―14で第1ゲームの混戦をものにした。

しかし、第2ゲームでは「ペリーにつかまるな」という鉄則を忘れたかのような日本ペアに、ペリーのインターセプトが、そしてウェブスターのサウスポーからのスマッシュがよく決まって、15―6でファイナルへともつれこんだ。

㋐ファイナルゲームのすべり出しは、両者動きが止まり、単発ラリー、単純ミスのくり返しであったが、3オールあたりから、再び激しいラリーの応酬となった。

ペリーの空振りとかウェブスターの凡ミスで米倉組としては貴重な3ポイントを得て8―5とリードしてチェンジエンド。

しかし、ペリー組も世界チャンピオンペア。じりじりと追い上げ、9―9から10―9と逆転した。ところが、ここでまたしてもペリーに凡ミスが2本続き、10オール。まさに大熱戦となってきた。

ここから、徳田のサービスをペリーがサイドアウトした後、徳田の小気味よいスマッシュが、ペリー、そしてウェブスターのフォアサイドに2発決まり、13―10とリード。その後、ペリー組が2本返し、13―12と満場手に汗を握る終盤戦。

サービス権を取りもどした米倉は、ひと呼吸入れるかのようにシャトルを交換し、ファーストサービスはつぶされたものの、セカンドサービスで、14―12のマッチポイント。

最後は日本ペアのスマッシュをウェブスターがネットにひっかけて、一進一退の大熱戦にピリオドを打った。



プラカシュに雪辱し、ハルトノを撃破しての優勝だけに、3千ポンド（約150万円）の賞金を受け取り、大喜びのリム・スイ・キン



大会終了後に主催者側へ花束を贈る近藤。突然にかり出されて照れてしまった



日本ペアがビッグイベントで優勝するのは久しぶりであり、しかもその勝ち方が、相手の不調によって勝ったのではなく、自から苦境を切り開いて打ち勝ったという点に、非常に意義があり、米倉のシングルスとともに、このダブルスの優勝はユーバー杯防衛への大きな自信となることはこの二人にとって間違いなく、よりいっそうの努力を期待したいものである。

㊟合ダブルスは、今回の台風の目となった地元のジリランド・チャップマン組が、世界チャンピオンのクリスチャン・イメルダ組に敢然と立ち向かったが、決勝では世界チャンピオン・ペアはまったくスキをみせず、15―6、15―6のストレートであっさりと打ち負かした。

再会を約して閉幕

㊄日間にわたり47試合のトップレベルの試合をすべて終了したコートに、全選手が整列、当日35歳の誕生日を迎えたスウェーデンのジョンソンが、選手を代表して主催者側にお礼を述べ、主催者代表としてスポンサーのフレンド・プロビデント社会長のフィリップ氏が、第3回大会は、来年の9月第4週に同じ場所で開催すること、そしてそれ以前に、ほぼ間違いなく5月第2週に中国チームを招き、初めての英中親戦試合を行なう計画であることを発表、満場の拍手の中、大会の幕を閉じた。

その栄光と落日…そしていま、再びフットライトを

マレーシアの光とかげり

オン・ポー・リン⇩ウォン・ペン・スン⇩エディ・チューン⇩タン・アイク・ハン⇩シデク兄弟

マレーシアといえば、マラヤ時代とあわせ、トマス杯大会を4回制し、全英選手権でも多くのタイトルを獲得した実力国ですが、その後すっかり鳴りをひそめていました。

その名門・マレーシアが再び世界のヒノキ舞台に登場してきました。

英国バドミントン協会の機関誌〝バドミントン〟9月号に、シンガポールのバドミントン愛好者でレストランの調理士をしているフランシス・チーが、「マレーシアの興亡」と題する寄稿をしていますので、ここに要訳して紹介いたします。

[1] 戦前のプレーヤー

一九五〇年代、六〇年代はマレーシアのバドミントンの全盛期だった。しかし、七〇年代に入る頃には、このスポーツの舞台から姿を消していた。

そして八〇年代が始まると、羽根打ちサービスのラジフとジャライニ、ひょろんと背の高い張り切り屋のミズブンの兄弟などが登場して、極東の空に復活の曙光がさしはじめてきた。

第二次大戦前の一九三七年、イギリスにやってきた日、S・サムエルは、静かなチャーミングな選手だが、マレーシア人によくあるようにパワーに難があった。

それでもかれはイギリスの強豪ビル・ホワイト、ドナルド・ヒューム、ラルフ・ニコルスたちを相手に屈することがなかった。フェイントと正確さがその武器だった。作家でありチャンピオンであるマーガレット・トレジェットは、「シャトルがまるでネットをよじ登ったり降りたりしているハツカネズミみたいに見える」と言ったものだ。

その後にもう一人のマレーシアの人気選手H・S・オーンが一シーズンだけだが登場する。6フィート4インチのアイルランド選手イアン・マコナキーと背の低いオーンとの風変りなチームは、スコットランド、イングランド勢を粉砕して観衆をわかせた。

[2] トマス杯優勝

しかしマレーシアが、世界のバドミントンを制するのは、大戦後のことになる。一九四九年、マレーシア勢は、イングランドで初めてのトマス杯に参加、ちょうど一九七三年の中国と同様、そのスピードは観衆にはびっくりするものだった。

インターゾーンの決勝では、十年間国内無敗のディヴ・フリーマンを擁してシングルに勝るアメリカも、ダブルスではマレーシアに全く手が出なかった。

イングランドを9―0と降したデンマークも、決勝では1―8とマレーシアに惨敗し、ウォン・ペン・スン、オーイ・テイク・ホック、オン・ポー・リンは、バドミントンの歴史にその名を残すことになった。主に戸外のコートで練習し、備品を自前で調達し、海路イングランドを訪れたチームがトマス杯を獲得したわけだ。

このマレーシア・チームが、その後の一九五二年、一九五五年と続くトマス杯連続優勝への道を開いたのだった。

同時にマレーシア勢は全英選手権のタイトルも手にしている。偉大な小男ウォン・ペン・スンは、一九五〇年、五一年、五二年と、ハイ・バックハンドを巧みに用いて、一九四九年フリーマンとの準決勝で惨敗した雪辱を果たした。

[3] エディ・チューンの登場

そしてマレーシア留学生、法律専攻のE・B・チューンの時代。全英選手権で六回連続決勝に進出し、二度タイトルを獲得したが、一九五五年に再びウォンにその座を護り、さらに一九五六・五七年にはみごとに取り戻した。その敗者の中には、鉄の男エルランド・コプス、フェイントの名手フィン・コペロなどのデンマークの強豪がいた。

かれの敏捷さ、猛烈なジャンプ・スマッシュ、全力をあげての返球――そして白い歯をほころばせた魅力的な笑顔――一度見た人は忘れることはないだろ

う。

静かだがいっそう機敏な兄E・L・ディヴィド・チューンと組んで、一九五一―五三年、三年連続して男子ダブルスに優勝もした。ディヴィドはさらにイングランドのネットプレーの女王ジューン・ホワイトと組んで一九五三年に優勝し、全英混合ダブルスで初のヨーロッパ人以外の勝者となった。

その後も一九七九年のクリスチャン・イメルダ組しか獲得していない王座である。

次のマレーシア人チャンピオンは一九六六年のタン・アイク・ハン。長身で髪を短く刈ったタンは日本の秋山を降したが、翌年エルランド・コプス、最後の試合に届した。そしてルディ・ハルトノの決勝の相手となった不運な犠牲者の長いリストの最初にその名を連ねることになった。

⑤ 黄金時代の終り

黄金時代は終った！　一九五〇―五七年の八年間無敵のマレーシアも、その後八〇年までたった一つタイトルを手にしただけだった。

インドネシアへの王座譲り渡しは一九五八年に始まった。四度目の王座を狙ったシンガポールでのトマス杯で6―3とインドネシアに敗れた。

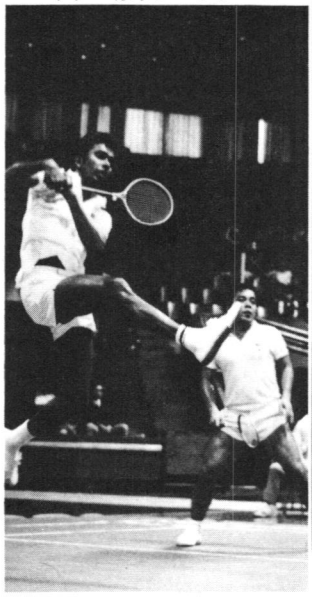
その後はインドネシアの天下。一九六七年大会でマレーシアは優勝してはいるけれども、これはマレーシア選手に対するインドネシア観衆の不当なマナーに対し、レフェリーが試合の中止を命じ、ニュージーランドでの試合再開のIBFの指示に応じなかったため不戦勝となったものだ。

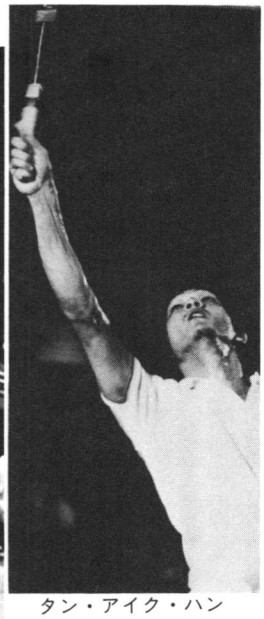
タン・アイク・ハン、ウン・ブン・ビー、タン・イー・カンの活躍した時代の出来事であった。ウンとタンのペアは一九六五年と六六年の全英のタイトルの獲得者だ。ウンは強力なジャンプ・スマッシュで観衆を引きつけていた。

五年後の一九七一年、ウンとパンチ・グナランが強敵インドネシアのハルトノとグナワンを追いつめて息を吹き返したかに見えた。だがその後、大戦前あれほどに輝かしかったマレーシアの燈火はかき消えてしまった。

一九七四年、パンチ・グナランがハルトノの連続七度目のタイトルを阻止するかに見えウェンブレーの観衆は身を乗り出すように得点を追ったが、残念ながら果たさなかった。

グナランの強烈なスマッシュ，パートナーはウン・ブン・ビー





タン・アイク・ハン

⑥ 低迷の時代

その後マレーシアは、全英や世界選手権のタイトルを獲得しなかったばかりか、選手団の派遣もなかった。どのような選手もチームも永久に不動の座にいることはできない。例外と見られるのはヨーロッパでのデンマーク。インドネシアも今は衰運のきざしはない。しかし、いつかはその時が来る。

それにしても、マレーシアは深い泥沼に落ちこんだ。人材の不足か、トレーニングの不足か。コーチがいないのか？　資力の不足か？　問題はさまざまだが、ともかく、マレーシアの選手たちはあまりに長い間、海外での国際試合の試練を受けていない。

⑦ 再びヒノキ舞台へ

最近になってこの国でも、再び若く力のある選手たちを見ることができたのは大変うれしいことだ。

ミズブン、ジャライニとラジフのシデク兄弟は、バドミントンの歴史を作ることができるだろうか？　この年齢（16～18歳）では何ごとも可能だ。

「シデク・サーブ」といわれる羽根打ちサービスは全く新奇なものではないが、兄弟はこれまでのインドネシア選手の誰よりももっと効果的に使っていることはキールストロムほかの各選手が認めるところだ。

強力なチームができるかどうかを口にするにはまだ早いが、経験、国際試合、トップクラスのコーチと訓練によっては、現状をくつがえすことは可能かもしれない。

世界選手権ではリム・スイ・キンから1ゲームを奪ったミズブン・シデクは親善試合でも全英チャンピオンのプラカシュを降した。

シデク兄弟は世界選手権でイギリスのスティブンス・トレジェット組を破り、準決勝ではチャンピオンのチャンドラ・クリスチャン組に対して、他のどのペアよりも多い9及び10の得点をマークした。

チャンピオンとなるべき資質ありと、私は信じている！

コプスのコーチを受けた10日間

すばやいタッチと攻撃的プレーをめざせ

ウエールズの若手プレーヤーで将来を有望視されているフィル・サットンは、デンマークでエルランド・コプスのもとで一週間のトレーニングを行ない、その感想を〝バドミントン〟9月号に寄せている。

そこで、要訳してご紹介するが、エルランド・コプスは、全英選手権シングルス優勝7回、ダブルス優勝4回という、60年代最強の選手である。

そのバックハンドは驚くべきパワーとコントロールを備えており、その技術をいまフレミング・テルフスが受けついでいる。

1 コーチの指示を受けて

全英選手権シングルスを7度制した偉大なデンマーク人エルランド・コプスの指導を受けた10日間。その夢のかなったのはもう14ヵ月も前のことになる。

全英選手権の終った日、僕は氷点下のデンマークに発った。エルランドはまだイギリスにいたが暖かい出迎えが寒さの埋合わせをしてくれた。

最初の晩すばらしいクラブを訪ね、デンマークのプレーヤーたちの激しいトレーニングに驚いた、練習の後はシャワーを浴び、半時間をサウナでくつろいでいる。

プレーヤーたちはクラブのコーチから指示を受ける。それはトップ・クラスも例外ではない。そして時間をかけてお互いのプレーを研究し、助言し合う。

2 コプス家の手料理

翌日はフェルローゼ・バドミントン・クラブを訪ね、シングルス、ダブルスのプレーをくり返した。ここでも皆熱心でクラブでの時間の効果的な利用に学ぶことが多くあった。プレーヤーたちは全般にプレー中体調が非常によく、安定しているようだ。正確で、激しい、効果的なスマッシュが印象的だった。

翌日もフェルローゼ・クラブ。滞在中に訪問したクラブのうち最高の一つだ。明るいコートにすばらしい設備もさることながら、もっと重要なのはクラブの運営方針だった。

しっかりとウォームアップをし、コーチからその夜各自の行なうゲームの指示を受ける。誰と組み、相手は誰かも決められる。

エルランドの家では夫人と二人のお嬢さんの観迎を受けた。その家に滞在し、かれと共に旅行、見物、トレーニングと過ごした時間はかけ足で去った。食物が肝心だと信じていて、夫人もかれも料理がうまい。僕もこの時ほど食の進んだことははじめてだった。

3 欠点の分析でしめくくり

エルランドの考えの重要な一部、そして前年指導してくれたゴードン・リチャーズから学んだことは、コーチやマネジャーはテクニックばかりでなく、教養の面、健康の面に気を配るべきだということだった。

僕はヨネックスの工場訪問のかたわら、ヘルシンゲル城や国立劇場にも足を運んだ。毎朝、トレーニング、浜辺でのランニングにも励んだ。

エルランドの指導は毎回「ウォーム・アップ」で始まり、「ウォーム・ダウン」で終った

試合は厳しく、最後に欠点の分析をしてくれる。設備の整った体育館でサウナに入り、そのあと水浴をする。

4 何よりもスピードが第一

エルランドは僕がこれまで教えられてきたことを裏書きすると共に、多くの技術的な点について詳しく説明を加えてくれた。どんな時にもスピードが肝心だと言っていた。背筋や腹筋をきたえると同時に、足首や脚を強くするトレーニングの必要を説いている。

「筋肉もそうだけど、心臓血管も健康でないとバドミントンのトレーニングはちゃんとやれないよ」と強調する。

エルランドはまた高いレベルのプレーが必要だと言っている——できれば自分よりすぐれたプレーヤーとプレーができてそこから学ぶこと、攻撃を多くし、キルしてできるだけ早くラリーを切り上げること。

5 プレーの組合せから矯正へ

一つの欠点を直す場合、それだけを練習させるのではなく、ゲームをしながら、スピード、かけ引き、ストロークを合わせてコーチするのが、エルランドをはじめデンマークのクラブのやり方だ。

イギリスのコーチングもデンマークと同じくすぐれている。違いは何に重きを置くかだ。デンマークでは、スピード、シャトルを早くとらえること、すべてのシングルスのゲームを迅速にプレーすることだった。

この機会の仕上げに、僕はデンマークのナショナル・チームとトレーニングをし、プレーにも加わった。忘れがたいのは、フレミング・デルフスそれからステーン・フラッドベルグとのプレーだった。

コプスについて

エルランド・オルソンは一九五七年にコプスと名前を変えた。

その年、全英選手権の決勝でマレーシア（当時マラヤ）のエディ・チューンに敗れたとき、新聞は〝エルランド殺られる（コプス・イット）〟とダジャレをいったものだった。

しかし。その後、はそのパワーと正確さで新聞の見出しをかざる伝説的人物への道を着実に歩んでいった。

全英選手権シングルス7回優勝は、インドネシアのルディ・ハルトノが現われるまでは、長い間肩を並べるものがない大記録だった。

さらに、最初にシングルスとダブルスを制した一九五八年から9年後に再び2種目を制している。そして、この年から3年連続でダブルスに優勝したのである。

コプスはその長いキャリアの間に、技倆とともにカリスマ性を着々と身につけていった。

常に体力を第一と考え、重り（おも）をつけたチョッキを着て練習したが、初めの頃のタイトルはそのスタミナと鉄壁の守りのおかげだった。

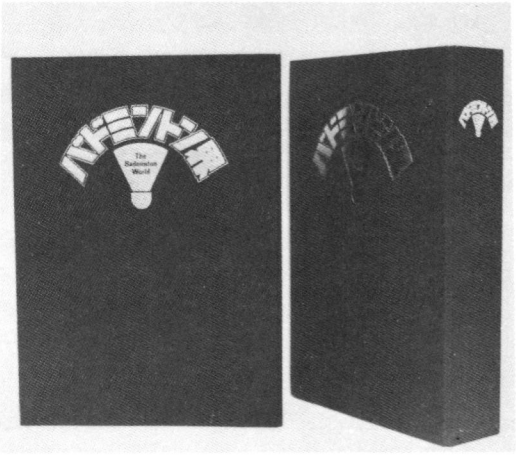
何物をも貫き通すような鋭いスマッシュが間もなくそれに加わった。そして、その〝カン〟は実に巧みなタッチを確実なものにした。

がっしりした体、はげ上がった頭、しかしアゴヒゲや口ヒゲは針金のようだ。コート以外のことにも関心が強く、何事も中途半端はきらいだ。

ほとんどのデンマーク人同様、自国の食物も酒も心ゆくまで味わう。

快活なビア樽の男は、記録ばかりでなく、観衆の心までも手に入れてしまうのだ。

専用合本バインダー 定価改訂のお知らせ



本誌は毎月発行ごとに保存しておけば，バドミントンの百科辞典となるものです。そのために本誌1年分12冊を，穴をあけたり，ノリを使ったりすることなく，かんたんに，しかも長い年月にわたって保存しておくことのできる“**専用合本バインダー**”をつくってまいりました。

しかし，用紙，レザーをはじめとする資材の値上りにより，このたび定価を**1冊 700円**に改定させていただきます。まことに申し訳ありませんが，ご了承のほどお願いいたします。〔本誌綴じ込みの振替用紙には旧定価＝500円と印刷してありますが，**訂正のうえ**ご利用くださるようお願いいたします〕

〈バドミントン界専用合本バインダー〉
表紙＝黒色レザーにタイトル銀パク押し
金具＝特殊クリップ使用
送料＝1冊500円、3冊まで850円、4冊以上すべて1000円
お申込み方法＝1冊定価 700円に，送料を加えて，本誌巻末とじ込みの振替用紙に必要事項を明記のうえ，お近くの郵便局からお申し込みください。

結び直しなどをやって，ひと息入れようとすることが多い。このような行為は前述の基本的な考え方にも反するので，試合がフル・ゲームになった場合は“例外”として，規則で休憩を認めることにしているわけである。

ただし，IBF規則では①ユ杯，トマ杯，世界選手権，公認の国際競技会等では「5分間を限度として」休憩を認める。②その他，各国の国内大会では，同様「5分間を限度として」休憩を認めるが，具体的な措置は各国協会に任せる――と定めている。

②の場合は，5分以内なら何分でもよく，全然与えなくても差し支えない，という意味である。これは気候風土，施設環境，プレーに対する考え方の伝統などの違いによって，国情もそれぞれ異なるからである。日本では競技規則22条第1項で，5分間の休憩を認めているが，英国系4協会（イングランド，アイルランド，スコットランド，ウェールズ）やベルギー，ノルウェー等では認めていない。

inter-zone インターゾーン。 トマス杯（略称トマ杯。男子の世界国別対抗戦）およびユーバー杯（略称ユ杯。女子の世界国別対抗戦）の“決勝大会”のこと。

この両杯では参加国は最初，世界の四つのゾーン（ゾーンは地域というような意味）に分かれて予選大会を争う。四つのゾーンとはヨーロッパ，アメリカ，アジアおよびオーストラレーシア（豪州地方の意）で，この各ゾーンの優勝国とカップ保持国，開催国の6チームの勝ち抜きによって新しい王座を争うのがインターゾーン。インターゾーンは「地域対抗の」という意味である。

☞ Thomas Cup（トマス杯），
Uber Cup（ユーバー杯）

（Iの項・完）

J・Kの項

judge ジャッジ。 スポーツ競技で最も普通に「審判員」を意味し，体操では四人の採点審判のこと。ボクシングなど特定の競技では「副審」に相当する役割をつとめる。

一般用語としては①動詞で「裁判する，審理する」など，②名詞で「裁判官，判事」などの意味だが，これはラテン語の「法律」と「いう」という言葉が合体したものが語源になっているからである。最高絶対の裁判官として「神」を意味することもある。また，単に広く「ものごとを判断する」ことにも使われ，たとえば“a judge of wine”といったら「ぶどう酒のめきき（鑑定家）」のことになる。

一般に，スポーツ競技で「審判」に該当する英語にはジャッジのほかreferee（レフェリー），umpire（アンパイア）さらにはlinesman（ラインズマン）等があるが，ジャッジ，レフェリー，アンパイアの役柄は競技によって異なる。

日本バドミントン協会は『大会運営規定』第5章『審判員』で「審判員は審判長，副審判長，主審，サービスジャッジ，線審とする」（第17条）と定めている。このおのおのの日本語に対応する英語はreferee，assistant referee，umpire，service judge，linesmen（線審は複数が動員されるのが原則だから）であってjudgeはいない。

☞ referee，umpire，service judge，linesman.

jump smash ジャンプ・スマッシュ。 ジャンプして，その頂点でスマッシュすること，またはその打球。Jumping smashともいう。①より高い打点で打つので，打球に角度とペース（球威）がつく。②より早いタイミングで打つので，相手の守りが不十分になる――の利点がある。

中国やインドネシアの第一線選手がよく用い，日本ではベテラン小島一平選手がとくに有名。強い筋力と高い技術が必要なので，基礎の固まらないものが，やたら飛びついても逆効果になることが多い。 （Jの項・完）

kill キル。 思い切って強打したショット。バドミントンやテニスではスマッシュ，バレーボールではスパイク（spike）と言い換えることができる。本来は「（相手を）殺す」こと。 （Kの項・完）

Lの項

lead リード。 すでに日本語化し，片カナのままで通用している。もともとは古代英語で「案内する，旅する」というような意味。スポーツ競技では，試合の途中経過で「だれ（どちらのチーム）が勝っているか」を示すのに使われる。

これにも大別して二つあり①は「先行する，優勢を保っている」。たとえば“He led all the way to take the second game that made the match one game all.”（終始先行して第2ゲームを奪い，かくして試合はゲームオールとなった）

②は，より具体的に「一方が相手より何点勝っているか」をいうものです。

（Lの項つづく）

バドミントンの用語ABC

後藤忠弘／編

Iの項・つづき

intercept インターセプト。 一定地点に向って移動中の人なり物体なりを，途中で横取りしたり，邪魔したりする行為をいい，動詞として使われる。スポーツ用語では，ボールのパスを途中で相手方が奪う意味だが，バドミントンでは飛球の進路にパッと横合いからラケットを突き出し，相手の意表を突いたタイミングでシャトルを打ち返すことを指す。

日本では同じ意味を俗に「カットする」で表わすことが多い。このカットが英語のcutを使ったものだとすると“cut off”といわなければインターセプトの意味にはならない。スポーツ用語でカットは「“刃物で野菜や果物などを切る”ようにボールを打つ」ことであり，バドミントンの場合は，シャトルに一種の横回転を与える打法（ドロップショットの応用）のことである。

☞ cut（カット）

intercollegiate インターカレッジエート。 inter-college(インターカレッジ)とも書く。大学対抗もしくは大学を代表する選手間の競技会の総称。日本では（全日本）学生選手権大会(intercollegiate championships)を指すのがふつう。俗に「インカレ」と呼ぶのは「インターカレッジエート」という言葉を勝手に途中でちょん切ったものだから，もちろん英語としては通じない。この語は“inter”と“collegiate”が結びついたもので，interは「～の中，間，相互」の意味の接頭詞。collegiateは「大学生の（カレッジの学生の）」という意味である。よく大会プログラムなどの表紙を見ると，れいれいしく“Inter College”のように，2語に分けて書いてあるものがあるが，これは誤り。

同様，interhighschool(インターハイスクール，高校大会）も「インターハイ」と呼ぶのは俗称にすぎないし，interとhighschoolを切り離して書くのもよくない。

ただし，このinterhighschoolは辞書には載っていない。これに代わる英語はinterscholastic（インタースコラスティック）で，これは「中等教育機関（secondary school）レベルの対抗戦」を意味し，日本の場合の中学または高校大会に相当する。

interfere インターフェア。 相手のプレーを妨害し，それが競技規則上，反則になるような行為の総称。オブストラクション（obstruction，動詞はobstruct）ともいう。

バドミントンの競技規則第14条「フォルト」の第10項には「プレーヤーが相手を妨害したとき」と述べられている。そして，具体的な事例としては次の2例があげられている。

①まず第16条のサービスに関する規定の一部として「それぞれのパートナー（注，ダブルスの場合をいっている）はサーバーやレシーバーを相手から見せなくしたり，妨害したりしなければ，どんな位置をとってもよい」。②として第20条では「プレーヤーがシャトルをネットの近くで下方へ打つときは，相手はシャトルがはね返るかもしれないような状態でネットの近くでラケットを上げてはならない。これは第14条第10項の妨害である。（注，「第10項の妨害である」とは「第10項で定義している妨害行為に相当する」という意味）しかしプレーヤーは相手を惑わさなければ，顔を防ぐためにラケットを上げてもよい」

また日本教職員バドミントン連盟審判部監修の「競技規則100問集」では，フォルトの1種である「オーバー・ザ・ネット」がインターフェアに該当すること，日本では，サービスの直前などに大声や奇声を発することは相手を精神的に妨害したものと考えて「フォルトにしている」と説明を加えている。

interval インターバル。 ふつうは，ものごとの中断時間，芝居の幕あいの休憩時間などを指すが，バドミントンでは試合の第2ゲームと第3ゲームの間の休憩時間のことである。

バドミントンには「プレーは継続的でなければならない」“Play shall be continuous from the first service until the match be concluded.”（IBF競技規則22条）すなわち，試合の途中に人為的な休憩などは，差し挟むべきでない，という基本的な考え方がある。このため，ケガや急病などが起こった場合の，いわゆる“事故タイム”なども規則上は設けられてはいない。これは，このような事態が発生したら，健康管理上からも，むしろ早く棄権する方がよい，との考え方にもとづいている。

しかし，現実には，試合時間が長びいてくると，プレーヤーは疲労回復のため，シャトル交換請求，靴ひもの

81年版カレンダーができました！

すっかりおなじみになりました「バドミントン・カレンダー The Badminton World Calendar」の1981年版ができました。

バドミントン・ファンの皆様のご要望をいれて、今年は大判（B3判＝本誌の4倍大）、カラー6ページ、アート紙使用としました。

収録選手は、わが国男子の第一人者・銭谷欽治。第2回マスターズ大会優勝ペアの米倉よし子・徳田敦子組。スピーディな速攻が魅力の飯野佳孝・土田証雄組。日本が生んだ世界の〝女王〟湯木博恵。切れのいいスマッシュと華麗なテクニックの長谷川博幸。

そして、今年は特別に一人のビッグスターを加えました。

それは小さな体いっぱいに闘志をこめてオールジャパンV8の記録を達成した〝ガッツ〟小島一平です。

そのプレーぶりと人柄から、わが国はもちろん、海外でも絶大の人気者でしたが、最近は引退の噂も出ています。そこで、これからもますますがんばってその素晴しいバドミントンを見せてほしい、という願いをこめて収録しました。

迫力ある、そして華麗なカラー写真でまとめた81年版カレンダーをぜひあなたの部屋、クラブのロッカールームに、コートサイドに飾ってください。

定価は800円ですが、送料は地域によって異なりますので（だいたい300円～800円程度）今年は代金後払いでお申込みを受け付けます。

本誌にとじこんだ「バドミントン・カレンダー申込み」ハガキに必要事項を明記して、お早めにお申し込みください。なお、郵送のさいは二ツ折になりますことを、あらかじめご了承ください。カレンダー発送のさいに、専用の振込用紙をお送りしますので、到着後一週間以内にお近くの郵便局からお振り込みください。

◆バドミントン・カレンダー'81送料◆

冊数 ＼ あて先	1冊	4冊まで	8冊まで	12冊まで	16冊まで	17冊～
東京23区内	300円	400円	460円	520円	580円	600円
第1地帯	300円	500円	580円	600円	600円	600円
第2地帯	300円	650円	700円	700円	700円	700円
第3地帯	300円	800円	880円	1,000円	1,000円	1,000円

★**第1地帯**＝23区を除く東京都下，神奈川，埼玉，千葉，茨城，山梨，静岡，群馬，栃木，福島，宮城，山形，新潟，長野，富山，岐阜，愛知，滋賀，石川，三重

第2地帯＝青森，岩手，秋田，福井，京都，大阪，奈良，和歌山，兵庫，鳥取，岡山，島根，広島，香川，徳島，高知，愛媛

第3地帯＝北海道，山口，福岡，大分，宮崎，熊本，鹿児島，佐賀，長崎，沖縄

編集室から

▼「栃の葉国体」は各種目に熱戦がくり広げられ、バドミントンに熱心な栃木県ということもあって、運営の面でも大成功でした。とくに民宿では手厚いおもてなしを受け、ぐずついた天気で洗濯ものが乾かないからといって、乾燥機をわざわざ宇都宮から取り寄せたお宅もあったそうです。選手にとっては一生忘れられない思い出となったことでしょう。

▼成年女子は全県出場ということで、懐しい人々の顔がみえました。浅利（柴山）きよ子さん、牧野（塩崎）睦子さんたちのプレーは、以前と全然変わっていませんでした。これからも家事、育児のスキ間をみつけてぜひプレーをしてほしいものです。

▼毎月多くの「愛読者カード」をお送りいただきありがとうございます。特集や連載の編成に役立っています。これからもどしどしお寄せください。

▼来月号は全日本学生選手権、国体詳報と、楽しい読物、役立つ記事をお届けします。

バドミントン界　The Badminton World

1980年11月号　©1980年　通巻第133号

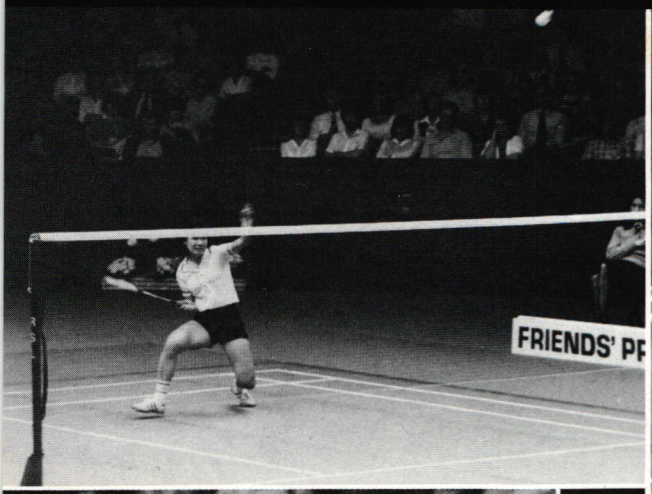
写真植字／サカキバラ写植
印刷・製本／根岸印刷

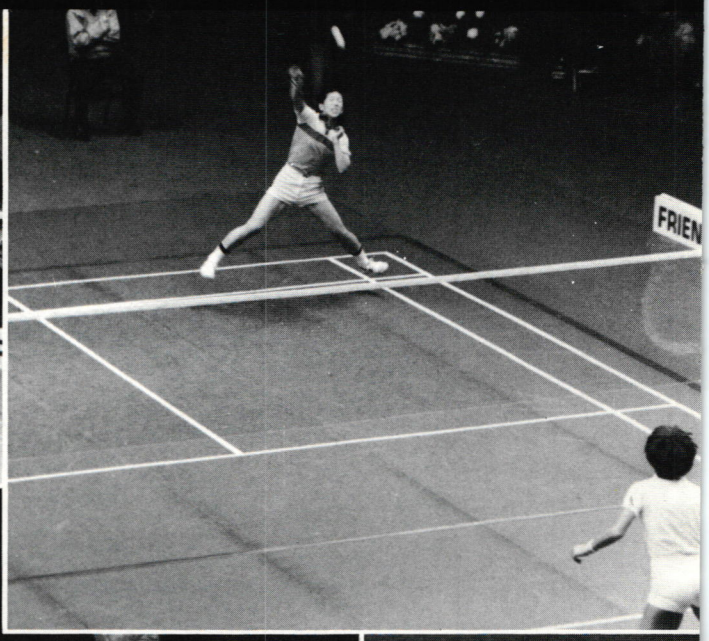
◇本誌の記事・写真等を許可なく転載・複写することを禁じます

定価＝300円　1年間予約購読料＝3000円（送料共）
振替＝東京8－10737

昭和55年11月15日発行
編集兼発行人／赤星三樹
発行所／赤星出版株式会社
東京都目黒区鷹番2－8－22－205　〒152
☎03－712－6952

第2回マスターズ・トーナメントから　*Ladies Singles*

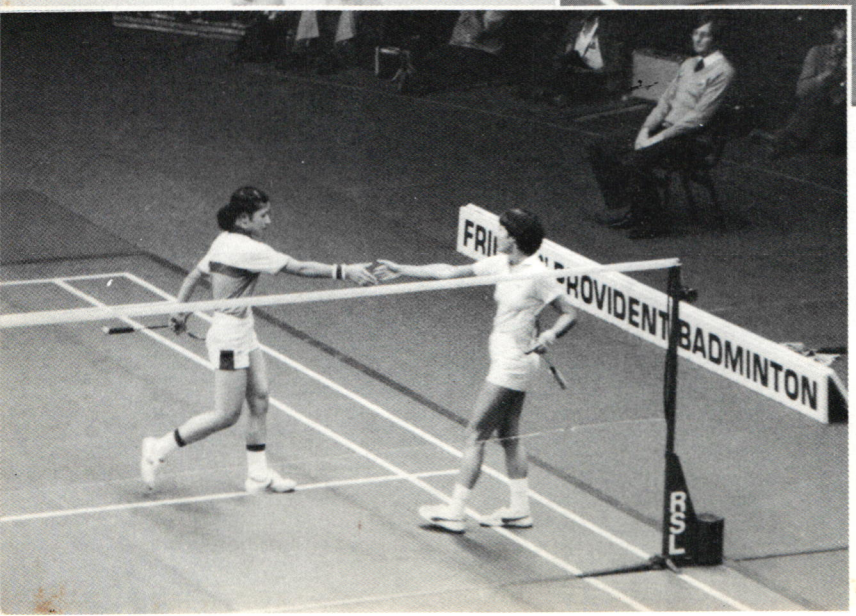












リーン・コーペンはインドネシアのホープ、イバナ・リー・イン・ホーのけんめいの攻撃も一蹴し（左上）、米倉と決勝で対戦した。米倉は積極的に攻め（右上、右下）コーペンをたじたじとさせた（左中）が、さすが実力ナンバーワンのコーペンはあわてなかった。じっくりチャンスを待ち、必殺のドロップショットからポップアップを誘い（中央）、ついに米倉を破った。大接戦だっただけに、コーペンは米倉にかけよって握手した（左下）。

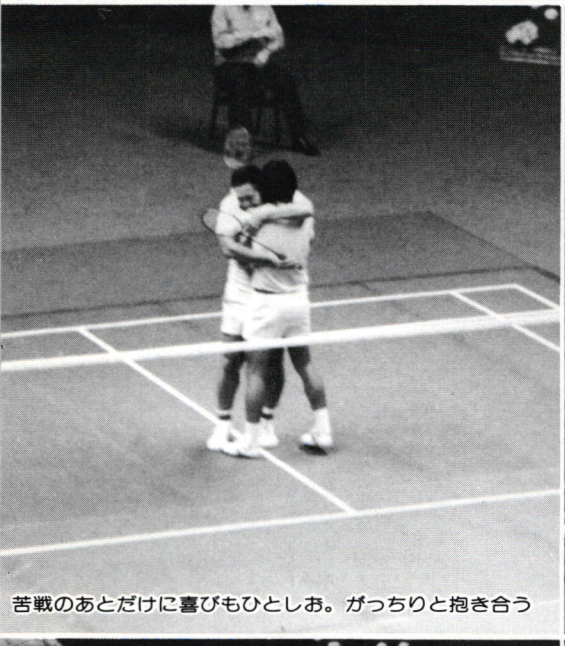
第2回マスターズ・トーナメントから
Gentlemen's Doubles



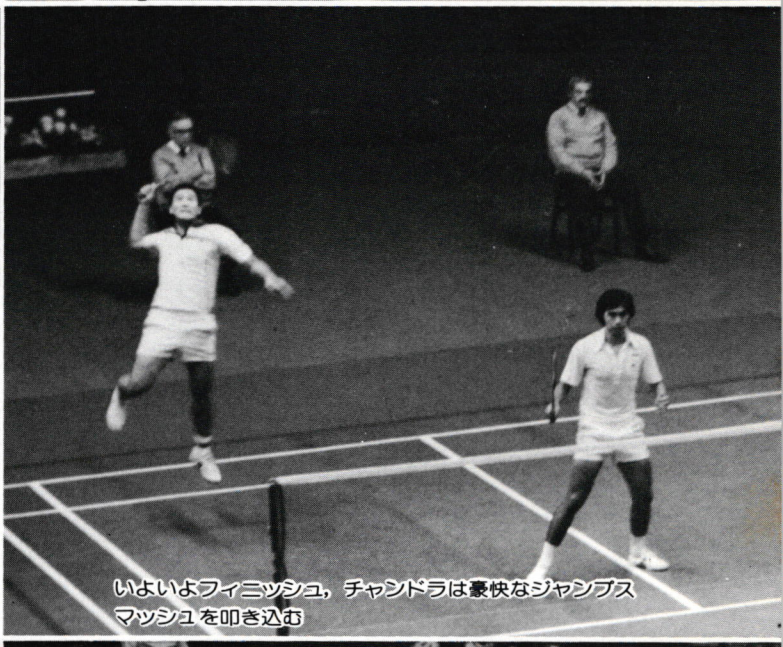
両手をかかげてチャンドラはクリスチャンに歩みより



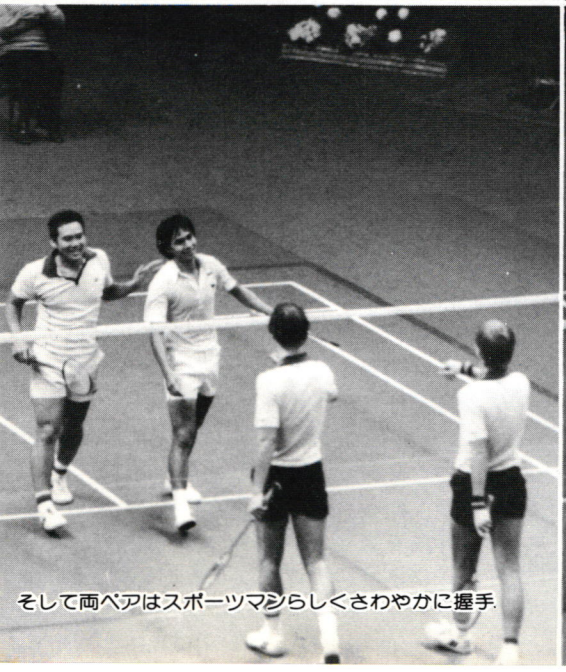
カールソンのスマッシュとキールストロムのテクニックが冴えてスウェーデン・ペアも健闘したが……



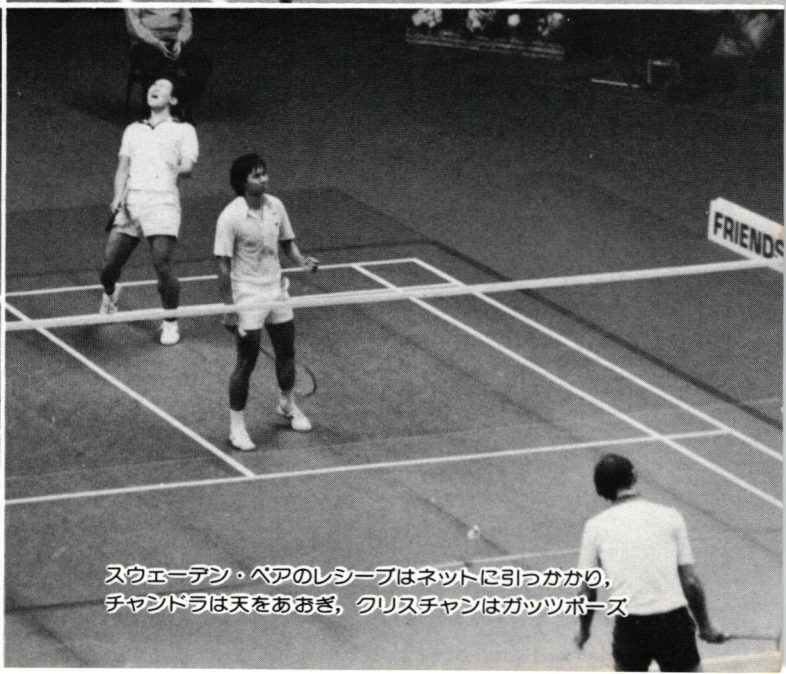
苦戦のあとだけに喜びもひとしお。がっちりと抱き合う



いよいよフィニッシュ，チャンドラは豪快なジャンプスマッシュを叩き込む



そして両ペアはスポーツマンらしくさわやかに握手

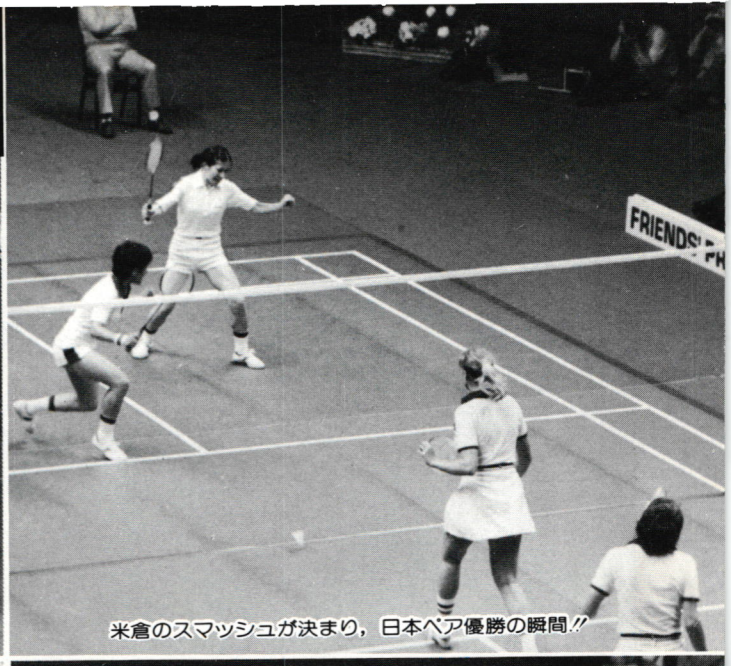


スウェーデン・ペアのレシーブはネットに引っかかり，チャンドラは天をあおぎ，クリスチャンはガッツポーズ

第2回マスターズ・トーナメントから
Ladies Doubles

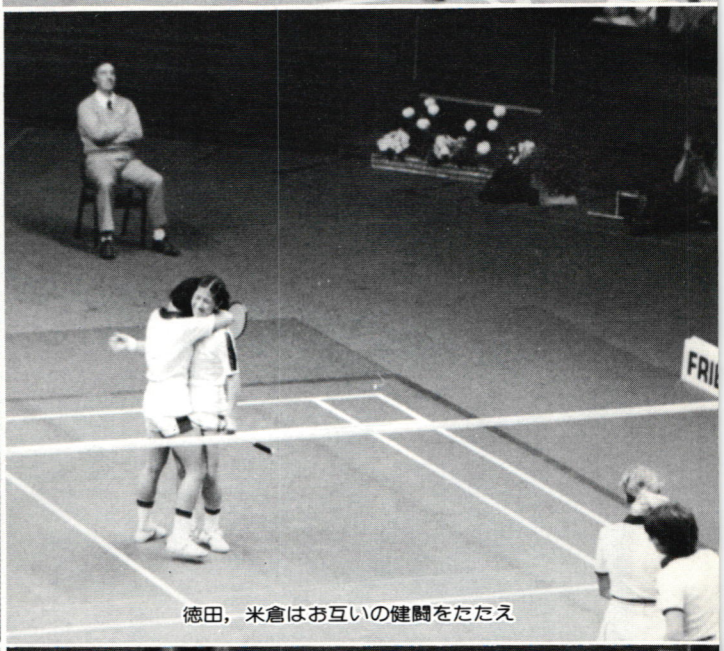


カメラマンの放列の前に優勝ペアをはさんだ準優勝ペア



米倉のスマッシュが決まり，日本ペア優勝の瞬間!!

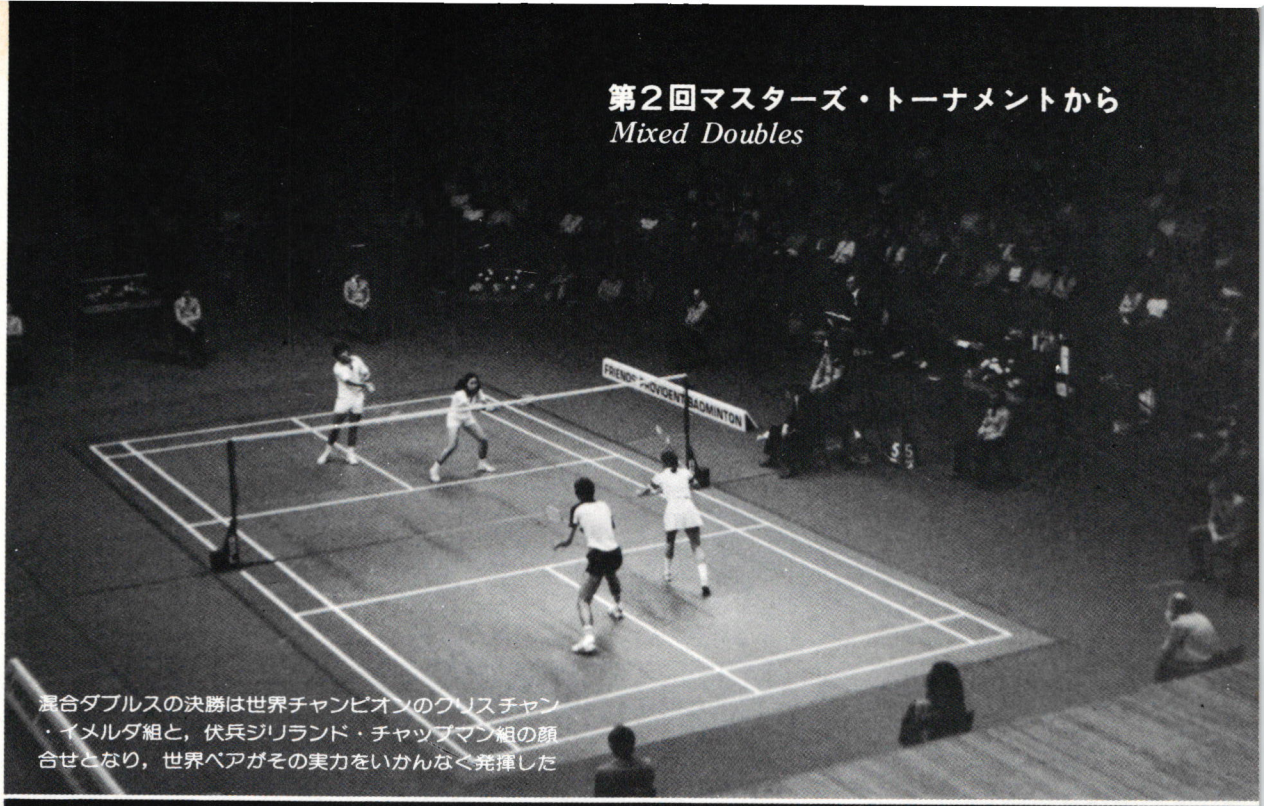

観衆の声援に手をあげてこたえる徳田と米倉


徳田，米倉はお互いの健闘をたたえ

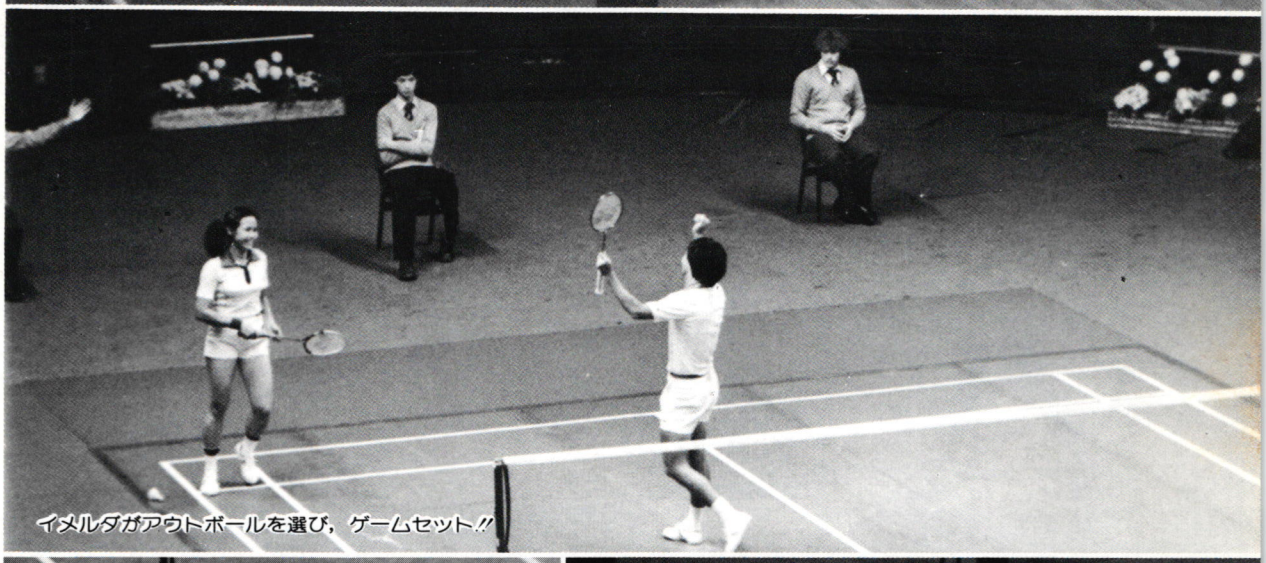

残念ながら勝ち星にめぐまれなかった近藤・高田


ベリーとウェブスターもネットをくぐって祝福した

第2回マスターズ・トーナメントから
Mixed Doubles



混合ダブルスの決勝は世界チャンピオンのクリスチャン・イメルダ組と，伏兵ジリランド・チャップマン組の顔合せとなり，世界ペアがその実力をいかんなく発揮した



イメルダがアウトボールを選び，ゲームセット!!



初参加で2位になった新鋭ペアに観衆は大かっさい



いつ見てもクリスチャンとイメルダの笑顔はさわやか



DÉFI

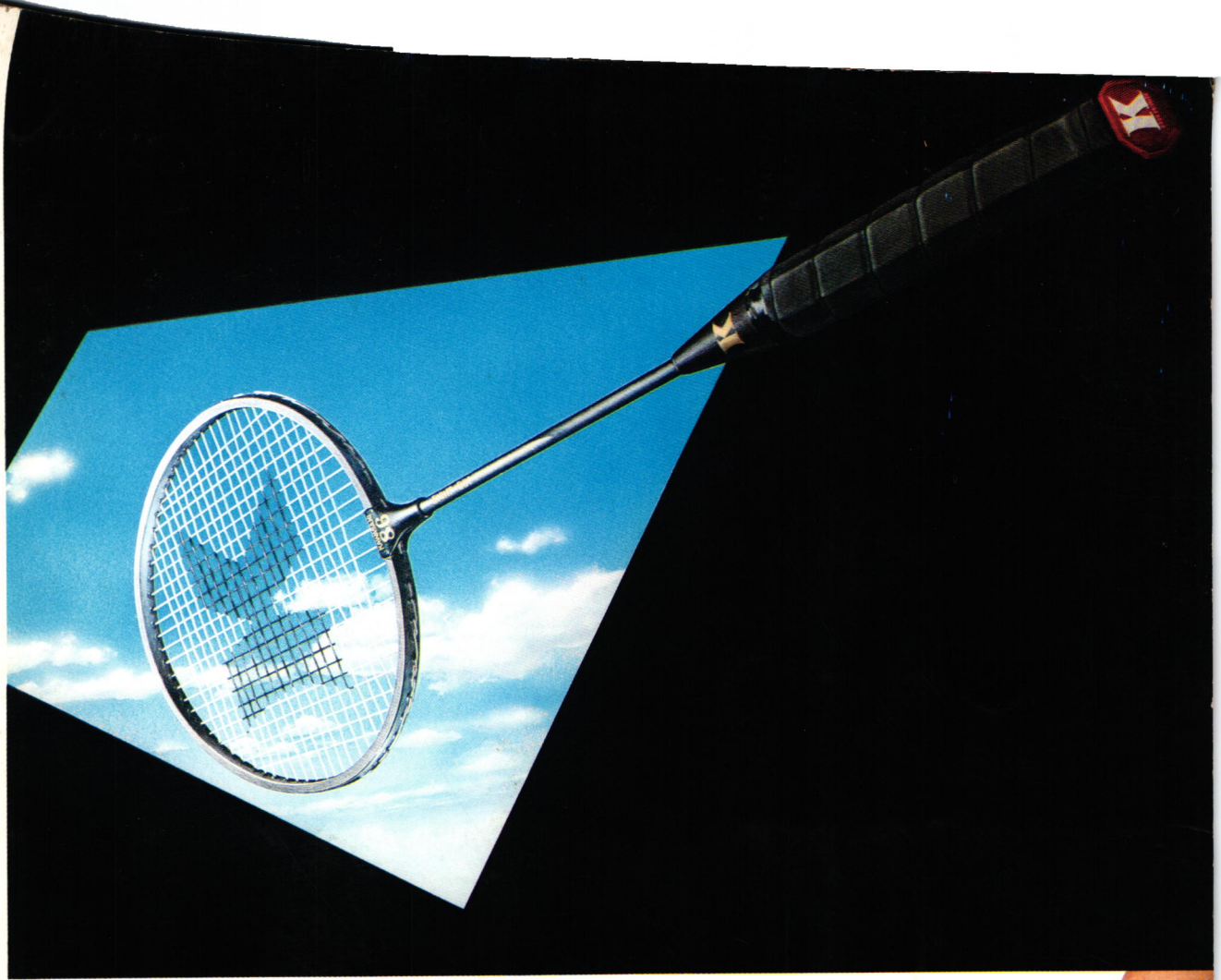
イタリアからColor Liberation最新版の到着。

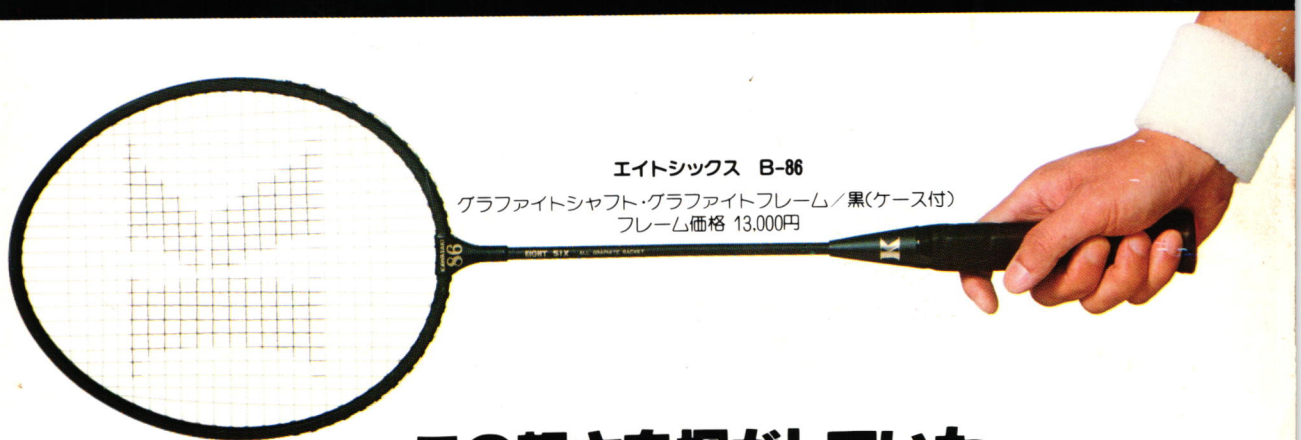
新鮮デフィ、新発売。

正統コットンホワイトのぼく。ところが、きょうのパートナーは、イタリアから新着のデフィのポロ。伝統の優れた機能性に、ファッショナブルなイタリアンフィーリングをコーディネイトしたNewデフィとは！ 鮮やかなイタリアンカラーが、ときにローマの華麗となって、ときにフィレンツェの繊細となって、コートを舞った。きみは、コートのウィナーになる前に、恋のウィナーになってしまうぞ。

kawasaki

河崎ラケット工業株式会社





エイトシックス　B-86

グラファイトシャフト・グラファイトフレーム／黒(ケース付)

フレーム価格 13,000円

この軽さを探がしていた。
ニューテクニックが生まれそうだ。

あるハイジャンパーは地球の引力に1㎝多く逆らうために2万回も跳んだ。いつの場合でも、スポーツマンの流す汗ほど貴重なものはない。ときにシャトルがおよそ200㎞／hourを起すバドミントンの世界でも、多くの汗が流された。そして手に、美しいB-86。“スピード時代”への完璧な対応を目指して……。

軽さで群を抜き、剛さでまた群を抜く。オールグラファイトB-86。新しい時代の王道へ、いま。

kawasaki

河崎ラケット工業株式会社